

回勅 信仰の光

教皇フランシスコ

FRANCISCI
SUMMI PONTIFICIS
LITTERAE ENCYCLICAE
LUMEN FIDEI

目次

序

文

幻想の光？／再発見しなければならない光

5

第一章

わたしたちは、愛を信じています（一ヨハネ4・16参照）

13

わたしたちの信仰の父であるアブラハム／イスラエルの信仰／
キリスト教信仰の完成／信仰による救い／信仰の教会的な形態

第二章

信じなければ、あなたがたは理解しない（イザヤ7・9参照）

34

信仰と真理／真理と愛の認識／聞くことと見ることとしての信
仰／信仰と理性の対話／信仰と神の探求／信仰と神学

第三章

わたしがあなたがたに伝えたのは、

わたしも受けたものです（一コリント 15・3 参照）

58

わたしたちの信仰の母である教会／秘跡と信仰の伝達／信仰と
祈りと十戒／信仰の唯一性と完全性

第四章

神は、彼らのために

都を準備されているのです（ヘブライ 11・16 参照）

77

信仰と共通善／信仰と家庭／社会生活を照らす光／苦しみの中
で慰める力／信じたかたは、なんと幸いです（ルカ 1・45）

注

訳者あとがき

101

94

教皇フランシスコ

回勅
信仰の
光

信仰について

司教、司祭、助祭、男女奉獻生活者、そしてすべての信徒の皆様へ

序 文

序 文

1 信仰の光——このことばによって、教会の伝統は、イエスがもたらした偉大なたまものを表します。イエスはヨハネによる福音書でご自身を次のように示します。「わたしを信じる者が、だれも暗闇の中にとどまることのないように、わたしは光として世に來た」(ヨハネ12・46)。聖パウロも同じことばを用いています。『闇から光が輝き出よ』と命じられた神は、わたしたちの心のうちに輝いて」(二コリント4・6) くださいます。光を切望した異教世界では、太陽神、すなわち「不滅の太陽(Sol invictus)」への崇拜が発展しました。人々は日の出とともに太陽に祈願をささげました。しかし、太陽が毎日新たに昇るとはいえ、それ

がすべての人の人生の上に光を輝かせるとは考えられません。実際、太陽は現実の全体を照らしはしません。その輝きは死の闇にまでは届きません。この闇の中で人間の目は光を見ることができないのです。殉教者聖ユスティノ（二〇〇頃—一六五年頃）はいいます。「だれも太陽信仰のゆえに進んで死んだ者はいない^①」。信仰が自分たちに開いてくれた広大な地平を意識しながら、キリスト信者はキリストをまことの太陽と呼びました。「その光はいのちを生み出します^②」。兄弟ラザロの死を嘆き悲しむマルタに向かってイエスはいいます。「もし信じるなら、神の栄光が見られると、いつておいたではないか」（ヨハネ11・40）。信じる者は、見ます。歩む道全体を照らしてくれる光をもつて、見ます。この光は、沈むことのない明けの星、復活したキリストが与えてくれるものだからです。

幻想の光？

2 けれども、この信仰の光について語ろうとすると、わたしたちと同時代の多くの人が反論を唱えます。近代においてはこう考えられます。そのような光は、古い社会にとっては満足できるものだったかもしれないが、新時代には役に立たない。理性を誇り、未来を新たなしかたで探究しようと望む、成人となった人間には役に立たないと。その意味で信仰は、人

間が大胆に知識を深めるうえでの妨げとなる幻想の光であるかのように思われました。若きニーチェ（一八四四—一九〇〇年）は妹のエリーザベトをこう招きます。危険を冒しなさい。「独り立ちでふらふらしながら……新しい道を進んでゆ」きなさいと。ニーチェは続けています。「ここで人間の歩む道は分かれるのだ。おまえがもし魂の安らぎと幸福とを得ようと努めるのなら、信仰をもつがいい。もし真理の使徒であろうとするのなら、探究するがいい」⁽³⁾。信仰と探究は相いれない。このことから出発して、ニーチェはキリスト教批判を展開することになります。キリスト教は、人間存在から力を奪い、人生から新しさと冒険を取り去るということです。こうして信仰は、解放された人間が未来に向かう妨げとなる幻想の光となるのです。

3 そこから信仰は暗闇と結びつけられました。理性の光と共存させるために、信仰の空間を残すことによって、信仰を救い出せると考えた人がいました。こうした信仰の空間は、理性が照らすことのできないところ、人間が確信をもてないところに開かれることになります。こうして信仰は、盲目の感情に促されて、光のない状態で行う暗闇への跳躍か、主観的な光だと考えられました。この主観的な光は、心を温め、私的な慰めをもたらしてはしても、道を

照らす客観的で普遍的な光として他の人に示すことのできないものです。しかし、少しずつ次のことが分かってきました。自律的な理性の光は、未来を十分照らすことができません。結局のところ、未来は依然として不明であり、人間は未知のものを恐れ続けます。こうして人間は偉大な光を、偉大な真理を探索するのをやめ、ささやかな光で満足しました。この光は短い瞬間輝きはしますが、道を示すことができません。光のないところでは、すべては混乱し、善悪を区別することも、目的へと通じる道と、方向を失って堂々巡りに陥る道とを区別することもできません。

再発見しなければならない光

4 それゆえ、信仰の光のあり方を再発見することが緊急に必要です。なぜなら、信仰の炎が消えれば、他のすべての光も消えてしまうからです。信仰の光は独自のあり方をもっています。それは人間存在全体を照らすことができるからです。これほど強力な光は、わたしたち自身に由来するものではありません。それはより根源的な源泉に由来するはずです。要するにそれは神に由来するはずで、信仰は生ける神との出会いから生まれます。神はわたしたちを招き、ご自身の愛を示してください。この愛はわたしたちに先立ちます。また

わたしたちはこの愛に支えられて、しっかりと立ち、人生を築くことができます。わたしたちはこの愛に造り変えられて、新しい目を与えられます。そして、この愛のうちに偉大な完成が約束され、未来への展望が開かれていることを悟ります。わたしたちが超自然的なまものとして神から受け取る信仰は、道を照らす光となります。この光は、時間の中を歩むわたしたちに方向を示すのです。一方で、この光は過去からもたらされる光です。それはイエスの生涯についての揺るぎない記憶に基づく光です。イエスの生涯は、死に打ち勝つことのできる、完全に信頼の置ける愛を示しました。けれども同時に、キリストは復活して、死を超えてわたしたちを引き寄せます。だから信仰は、未来から来て、わたしたちに大いなる展望を開く光でもあります。それはわたしたちを孤立した「自我」から広い交わりへと連れ出すのです。それゆえ次のことが分かります。信仰は暗闇を住みかとしているのではなく、むしろ信仰は、わたしたちの闇を照らす光です。ダンテ（一二六五—一三二二年）は『神曲』の中で、聖ペトロへの信仰を告白した後、こう述べます。信仰は「火花。火花は末広がり（⁴）に伸び広がって、勢いたけき焰となり、天上の北斗のごとく、わがうちに煌きわたる」。

わたしたちが語りたいのはこの信仰の光です。それは、この光が大きくなって現在を照らすためです。そして、ついにはそれが星となって、人類が特別に光を必要としているこの時代

に、わたしたちの歩むべき道の行く手を照らしてくれるためです。

5 主は受難の前にペトロにこう約束されました。「わたしはあなたのために、信仰がなくならないように祈った」(ルカ22・32)。それから主はペトロに、「兄弟たち」の信仰「を力づけてやりなさい」と命じました。ペトロの後継者にゆだねられた務めを自覚しつつ、ベネディクト十六世はこのたびの「信仰年」を開催することを望みました。「信仰年」は、わたしたちが信じることの深い喜びを感じ、信仰が開く地平の広大さをあらためて認識する助けとなる、恵みの時です。それは、聖霊の現存と働きに支えられながら、主の記念を忠実に保ち、唯一の完全な信仰を告白するためです。信仰は人生を偉大で完全なものとしめます。信仰はキリストとその恵みの力を中心としています。この信仰から生まれる確信が、初期キリスト者の宣教を促しました。『殉教録』の中に、ローマ総督ルスティクスとキリスト信者ヒエラクスの次の対話が収められています。判事は殉教者に尋ねます。「おまえの両親はどこにいるのか」。殉教者は答えています。「わたしのまことの父はキリストです。わたしの母はキリストへの信仰です」⁵。当時のキリスト信者にとって、キリストのうちに示された生ける神との出会いとしての信仰こそが「母」でした。信仰は彼らを光へと導き、彼らのうちに神のい

のちを生み出したからです。この新たな経験と、人生についての輝かしい見方を、彼らは最後まで公にあかししようとしたのです。

6 「信仰年」は、第二バチカン公会議開幕五十周年を記念して開年しました。このことは、第二バチカン公会議が信仰に関する公会議だったことを理解させてくれます。^⑥公会議は、教会生活においても個人の生活においてもキリストにおける神をあらためて第一に優先することを求めたからです。実際、教会は、信仰を当然のものとみなすことがありません。むしろ教会は、信仰が神のたまものであり、自らの歩みを導き続けてもらうために、それを育て、強めなければならないことを知っています。第二バチカン公会議は、信仰を人間的経験の内側から輝かせ、現代の人々とともに歩ませることができました。こうして信仰が人間生活のあらゆる次元を豊かにすることが明らかとなりました。

7 対神徳としての信仰に関して教会教導職が述べてきたすべてのことを引き継ぎながら行う^⑦、この信仰に関する考察は、ベネディクト十六世が愛と希望について書いた回勅に付け加わるものです。ベネディクト十六世はすでに信仰に関する回勅の草稿をほとんど完成させて

いました。わたしはベネディクト十六世にこのことを感謝しながら、キリストにおける兄弟としてその貴重な労作を受け取り、わずかな追加を行いました。ペトロの後継者は、昨日も今日も明日も、永遠に、神がすべての人の道の光として与えてくださった貴重な宝である信仰において、「兄弟たちを力づける」よう招かれています。

神から注がれた超自然的なたまものである信仰によって、わたしたちはこう認めます。偉大な愛がわたしたちに示されました。いつくしみ深いみことばがわたしたちに語りかけられました。そして、このみことばを、すなわち受肉したみことばであるイエス・キリストを受け入れることによって、聖霊がわたしたちを造り変え、未来への道を照らし、この道を喜びをもって歩むための希望の翼を大きく成長させます。驚くべきしかたで結び合わされた、信仰と希望と愛は、神との完全な交わりへとキリスト教的生活を促す力です。信仰がわたしたちに開いてくれるこの道は、どのようなものなのでしょうか。人生の道を照らし、実り豊かなものとしてくれる、この力強い光は、どこから来るのでしょうか。

第一章 わたしたちは、愛を信じています（一ヨハネ4・16参照）

わたしたちの信仰の父であるアブラハム

8 信仰はわたしたちに道を開くとともに、わたしたちの歴史の歩みに同伴します。そのため、信仰とは何かを理解したいなら、初めに旧約の中であかしされた、信仰の歩み、すなわち信仰者の歩んだ道を語らなければなりません。特別な位置を占めているのは、わたしたちの信仰の父であるアブラハムです。アブラハムの生涯において、驚くべき出来事が起こります。神はアブラハムにみことばを語りかけます。神は、語り、名をもって呼ばれる神としてご自身を現します。信仰は聞くことと結ばれています。アブラハムは神を見ませんでした、が、み声を聞きます。こうして信仰は個人的な性格をとります。神は特定の場所の神でも、特別

に聖なる時と結ばれた神でもありません。むしろ神は、ある人々の神です。アブラハム、イサク、ヤコブの神です。神は、人とかかわり、人と契約を結ぶことのできるかたです。信仰は、個人的に語りかけるみことばへの、わたしたちを名をもって呼ぶ「あなた」への応答です。

9 みことばがアブラハムに語りかけたことの内容は、呼びかけと約束です。第一に、それは自分の土地を離れよという呼びかけです。新たな生活に心を開きなさいという招きです。ある種の出エジプトの始まりです。この出エジプトは、アブラハムを予期せぬ未来へと導きます。信仰がアブラハムに与える展望は、つねに先へと進まなければならない歩みと結びついていきます。信仰は、歩みながら、神のことばが開いた場に歩み入りながら「見る」のです。このみことばはさらに約束も含んでいます。あなたの子孫は数えきれないであろう。あなたは大いなる民の父となるであろう（創世記13・16、15・5、22・17参照）。まことに、アブラハムの信仰は、先立つみことばに対する応答であるかぎりにおいて、つねに記念する行為になります。にもかかわらず、この記念は、過去と結びついていてのではなく、約束の記念であるがゆえに、未来を開き、歩むべき道を照らすことができます。ここから、信仰は、未来の記

憶 (memoria futuri) であるかぎりにおいて、希望と密接に結びついていることが分かります。

10 アブラハムが求められたのは、このみことばに身をゆだねることです。信仰は次のことを悟ります。はかなく過ぎ去るように見えることばも、忠実な神によって語られるとき、きわめて確かで揺るぎないものとなり、わたしたちが時間の中で歩み続けることを可能にします。信仰はこのみことばを確かな岩として受け入れます。この岩の上に堅固な基盤を築くことができるからです。そのため聖書の中で信仰は、ヘブライ語で「エムナー (emnah)」ということばで示されます。これは「アマン (aman)」という動詞に由来します。この動詞の語根の意味は「支える」です。「エムナー」ということばは、神の忠実と人間の忠実の両方を意味することができます。忠実な人は、忠実な神のみに身をゆだねることによって力を得ます。このようなことばの二重の意味——それは対応するギリシア語 (πίστις) やラテン語 (fidelis) にも見られます——を用いて、エルサレムの聖チリロ (三一五頃—三八六/三八七年) は、キリスト信者の尊厳をたたえます。キリスト信者は神ご自身の名をもつからです。キリスト信者も神も「忠実な者」と呼ばれます。⁽⁸⁾ 聖アウグスティヌス (三五四—四三〇年) はそれをこう解説します。「人は神の約束を信ずるとき忠実である。神は人間に約束したことを行うと

き誠実である」⁽⁹⁾。

11 アブラハムの物語の最後の点は、彼の信仰を理解するうえで重要です。神のことばは、たとえ新しさと驚きをもたらしてはしても、太祖アブラハムの経験にとつて異質なものではありませんでした。アブラハムは、彼に語りかけられたことばのうちに深い呼びかけを聞き取りました。この呼びかけは彼の心のうちにつねに刻まれていました。神はご自分の約束を、人間生活が約束に満ちたものとして示される「場所」に結びつけます。すなわち祖国と、新しいのちの誕生です。「あなたの妻サラがあなたとの間に男の子を産む。その子をイサクと名づけなさい」(創世記17・19)。ご自身に完全に身をゆだねるようにとアブラハムに求めた神は、あらゆるいのちが生まれる源泉としてご自身を現します。こうして信仰は、神が父であることと結びつけられます。被造物は神から生まれるからです。アブラハムを召し出した神は、造り主である神です。「存在していないものを呼び出して存在させる」(ローマ4・17)かた、「天地創造の前に……わたしたちをお選びになり……神の子にしようと、み心のままに前もつてお定めになった」(エフェソ1・4―5)かたです。アブラハムにとって、神への信仰は自らの存在の奥底を照らすものでした。それは、彼が万物の根源にあるいつくしみの源

泉を見いだし、自分の人生が無や偶然からではなく、個人的な呼びかけと愛から生まれたことを確認するのを可能にしました。彼を招いた不思議な神は、見知らぬ神ではなく、万物の源泉であり支えであるかたです。アブラハムの信仰にとつての最大の試練となった、息子イサクの犠牲は、この根源的な愛が、死を超えたいのちをも保証できることを示します。アブラハムの「哀え」だからだと、「子を宿せない」(ローマ4・19参照)サラの不妊の胎^たから子を生み出すことのできたみことばは、あらゆる脅威や危険を超えた未来を約束できるのです(ヘブライ11・19、ローマ4・21参照)。

イスラエルの信仰

12 出エジプト記に書かれたイスラエルの民の歴史は、アブラハムの信仰の模範を引き継ぎます。信仰はあらためて根源的なまものから生まれます。イスラエルは、自分を悲惨な状態から解放しようと望まれた神のわざに信頼します。信仰は長い旅への呼びかけです。それは、シナイ山で主を礼拝し、約束の地を受け継ぐためです。神の愛は、子を背負って長い道を歩む父にたとえられます(申命記1・31参照)。イスラエルの信仰告白は、神の恵みと、民を解放し導かれたみわざを語るることによって行われます(申命記26・5―11参照)。民はこの物

語を世々に伝えました。神の光は、主の行われたわざを思い起こすことを通じて、イスラエルに輝きます。このわざは礼拝の中で記念・告白され、親から子へと伝えられました。ここから、信仰の光が、生活の具体的な物語、神のみわざへの感謝と記念、約束が次第に実現されたことに結ばれていることが分かります。ゴチック建築はこのことをよく表します。壮大なカテドラルの中で、光は上から、救いの歴史を描いたステンドグラスを通ってさし込みます。神の光は、神の啓示の歴史を通してわたしたちに達します。こうしてそれは、わたしたちの時間の中で歩みを照らすことができます。神のわざを思い起こさせ、どのようにご自身の約束を実現されたかを示しながら。

13 イスラエルの歴史は、不信仰への誘惑をも示します。民は何度も不信仰に陥ったからです。ここで信仰の反対は、偶像崇拜として現れます。モーセがシナイ山で神と語っていると、民は、神の顔が隠されているという神秘に耐えられませんでした。待っている時に耐えられませんでした。信仰は本来、視覚が与えてくれるような、即時の所有を放棄することを要求します。信仰は光源へと向かうようにという招きです。そのために、み顔の神秘を尊重しなければなりません。み顔は、個人的に、ふさわしいときに現されるからです。マルテ

イン・ブーバー（一八七八年—一九六五年）は、コックのラビによる偶像崇拝の定義を引用しています。偶像崇拝とは「顔が、顔ではない顔に注意を向けることである」⁽⁹⁾。人は、神への信仰の代わりに偶像を崇拝することを選びます。人は偶像の顔を見つめることができ、その起源も知っています。わたしたちが作ったものだからです。偶像の前では、自分の安定を捨てるよう求められる恐れありません。偶像は「口があっても話せない」（詩編115・5）からです。そこから次のことが分かります。偶像は、自分を現実の中心に置き、自らが作ったものを崇拝するための口実です。人間が、自らの存在を一つにまとめる根本的な方向づけを見失うなら、多くの欲望へと分散します。約束の時を待つことを拒むなら、生涯の中の無数の瞬間へと拡散していきます。だから偶像崇拝はつねに多神教です。一人の主人から別の主人へとあてもなくさまようことです。偶像崇拝が示すのは、一つの道ではなく、無数の小道です。それらの小道は確固とした目的に向かわないばかりか、迷宮へと迷い込ませます。神に身をゆだねようとしなない人は、「わたしに信頼しなさい」と叫ぶ無数の偶像の声を聞かなければなりません。回心と結ばれた信仰は、偶像崇拝の反対です。それは、個人的な出会いを通じて生ける神に立ち帰るために、偶像と決別します。信じるとは、あわれみ深い愛に身をゆだねることです。この愛はつねに受け入れ、ゆるします。人生を支え、導いてくれます。

わたしたちの人生のゆがみを正す力を示します。信仰は、神の呼びかけによってつねに新たに造り変えていただこうとする態度です。ここに逆説があります。人間は、たえず主に向かうことによって、確かな道を見だし、偶像によって支配されたあてどない彷徨から解放されるのです。

14 イスラエルの信仰の中には、神と人との仲介者であるモーセの姿も見いだされます。民は神のみ顔を見ることができませんが、モーセは山の上でYHWH（主）と語り、すべての人に主のみ心を示します。このような仲介者がいることにより、イスラエルは一致して歩むことを学びます。個人の信じる行為は、共同体へと、すなわち民の共同の「わたしたち」と接ぎ木されます。共同体は信仰において、一人の人のようなものです。神がイスラエル全体を「わたしの長子」（出エジプト4・22参照）と呼んだようにです。この場合、仲介は妨げではなく、むしろ開示することです。わたしたちの目は、他者と出会うことによって、自分たちよりも偉大な真理へと開かれます。J・J・ルソー（二七二年―一七七八年）は自分が個人的に神を見ることができないことを嘆きました。「神とわたしとのあいだになんと多くの人間がいることか！」。^[1]「ジャン・ジャック・ルソーに話しかけるために神がモーセを探しに

行ったというのは、普通のことでしょうか。当然なことでしょうか⁽¹²⁾。個人主義的で限定された認識概念から出発するなら、仲介の深い意味を理解することはできません。仲介とは、他者の視覚にあずかることです。それは認識の共有であり、愛に固有な認識です。信仰は神の無償のたまものです。このたまものは、信頼し、身をゆだねるへりくだりと勇気を求めます。それは、神と人が出会うための輝かしい道、すなわち救いの歴史を見いだすためです。

キリスト教信仰の完成

15 「アブラハムは、わたしの日を見るのを楽しみにしていた。そして、それを見て、喜んだのである」(ヨハネ 8・56)。このイエスのことばに従うなら、アブラハムの信仰はイエスを指し示します。それはある意味でイエスの神秘を前もって見るのです。聖アウグスティヌスがいおうとしたのもこのことです。彼はいいます。太祖たちは、信仰によって救われました。この信仰は、すでに来られたキリストを信じる信仰ではなく、来ようとしているキリストを信じる信仰です。イエスの未来の出来事へと向かう信仰です。キリスト教信仰はキリストを中心としています。それは、イエスが主であり、神がイエスを死者の中から復活させられたと告白することです(ローマ 10・9 参照)。旧約のすべての糸はキリストへと集まります。キ

リストはすべての約束に対する決定的な「然^{しか}り」であり、わたしたちの神に対する「アーメン」の究極的な基盤です（二コリント1・20参照）。イエスの生涯は、神がより頼むことのできるかたであることの完全な現れです。イスラエルは神の偉大な愛のわざを思い起こしました。この愛のわざがイスラエルの信仰告白の中核をなし、その信仰のまなざしを広げました。そうであれば、今やイエスの生涯は、神の決定的な働きかけの場、わたしたちに対する神の愛の最高の現れとなります。神がイエスのうちにわたしたちに語りかけたことは、単なるさまざまなことばの一つではなく、永遠のみことばです（ヘブライ1・1―2参照）。神はご自分の愛についてのこれ以上の保証を与えることができません。聖パウロが述べるとおりです（ローマ8・31―39参照）。それゆえキリスト教信仰は、完全な愛への信仰です。この愛のたくましい力、世を造り変え、照らす力への信仰です。「わたしたちは、わたしたちに対する神の愛を知り、また信じています」（ヨハネ4・16）。信仰は、イエスにおいて示された神の愛のうちに、現実とその究極目的の基盤を見いだすのです。

16 キリストの愛が信頼の置けるものであることの最大の証拠は、彼が人間のために死んだことのように見いだされます。友のためにいのちをささげることが愛の最大の証明なら（ヨ

ハネ15・13参照)、イエスはご自分のいのちをすべての人のため、しかも敵のためにもささげました。それは、彼らの心を造り変えるためです。だから福音書記者たちは十字架の時を、信仰のまなざしの頂点として位置づけるのです。このとき、神の愛の深さと広さが輝き出るからです。聖ヨハネは、刺し貫かれたかたをイエスの母とともに仰ぎ見るとき、莊嚴なあかしを行います(ヨハネ19・37参照)。「それを目撃した者があかししており、そのあかしは真実である。その者は、あなたがたにも信じさせるために、自分が真実を語っていることを知っている」(ヨハネ19・35)。F・M・ドストエフスキー(一八二一—一八八一年)は『白痴』の中で、ハンス・ホルバイン(子)(一四九七—一四九八—一五四三年)の「墓の中の死せるキリスト」を見た主人公のムイシキン公爵にこう語らせませす。「あの絵を見たら人によつては信仰が失われるかもしれないっていうのに！」¹⁴。実際、この絵は、キリストの肉体に対する死の破壊的な効果をきわめて残酷なしかたで描いています。にもかかわらず、まさにイエスの死を仰ぎ見ることによつて、信仰は強められ、輝く光を与えられるのです。このまなざしのうちに、わたしたちを救うために死ぬことができた、イエスのわたしたちに対する揺るぎない愛への信仰が表されるからです。わたしは、わたしへの愛を表すために死をもいとわない、このような愛を信じることができます。キリストの完全な自己奉獻は、あらゆる疑いに打ち勝ち、

わたしたちが完全にキリストに身をゆだねることを可能にしてくれるのです。

17 キリストの死は、何よりも復活の光のもとで、神の愛が完全に信頼の置けるものであることを現します。復活したキリストは、信じるに足る、信頼の置ける証人であり（黙示録1：5、ヘブライ2・17参照）、わたしたちの信仰の堅固な支えです。聖パウロはいいます。「キリストが復活しなかったのなら、あなたがたの信仰はむなし」（一コリント15・17）。御父の愛がイエスを死者の中から復活させず、キリストのからだをよみがえらせることができなかったなら、その愛は完全に信頼の置けるものではなく、死の闇を照らすこともできません。聖パウロはキリストに結ばれた新しいのちについて語る際に、「わたしを愛し、わたしのために身をささげられた神の子に対する信仰」（ガラテヤ2・20）に言及します。この「神の子に対する信仰」は、確かに異邦人の使徒のイエスへの信仰のことですが、イエスがより頼むことのできるかたであることも意味しています。このことはイエスが死に至るまで愛したことだけでなく、また彼が神の子であることに基づきます。イエスは子であり、絶対的なしかたで御父のうちにおられました。だからこそ、彼は死に打ち勝ち、完全ないのちを輝かせることができたのです。現代文化は、神の具体的な現存や、世における働きに対する感覚を失

ってしまいました。わたしたちは、神は来世の、現実の別次元に、わたしたちの具体的な関係とは切り離されたかたちで存在すると考えます。しかし、もしそうであれば、すなわち、神が世において働くことができないなら、神の愛は力をもたず、真の意味での現実ではなく、それゆえ真の愛ではなくなります。それは約束する幸福を実現できません。神を信じるか、信じないかは、どちらでもよいことになります。これに対して、キリスト信者は神の具体的で力ある愛を認めます。この愛は本当に歴史の中で働き、その究極目的を決定します。この愛は、わたしたちが会おうことのできる愛です。キリストの受難と死と復活によって完全に現された愛なのです。

18 イエスが信仰にもたらした完全性にはもう一つの決定的な側面があります。信仰において、キリストは、わたしたちが信じるかたであり、神の愛の最高の現れであるだけではありません。キリストは、わたしたちが信じることができるようになるために、わたしたちをご自身へと結びつけてくださるのです。信仰は単にイエスへのまなざしだけではありません。それはイエスの視点から、イエスの目をもって見ることもあります。それはイエスの物の見方にあずかることです。わたしたちは生活の多くの分野で、自分よりも物事をよく知って

いる他の人に信頼します。わたしたちは家を建てる建築家、治療薬を与える薬剤師、法廷で弁護してくれる弁護士を信頼します。わたしたちは神に関することがらについても、信頼できる専門家を必要とします。御子イエスは、わたしたちに神を知らせるかたとしてご自身を示します（ヨハネ1：18参照）。キリストの生涯——その御父を知り、完全に御父との関係のうちに生きた生き方——は、人間の経験に新しい場を開き、わたしたちがその場に入ること有可能にしてくれます。聖ヨハネは、「信じる」という動詞のさまざまな形を用いて、わたしたちが信じるためにイエスと個人的な関係をもつことの重要性を示します。イエスが語られたことが真実だ「と信じる」こと（ヨハネ14：10、20：31参照）に加えて、ヨハネはイエス「を信じる」、イエス「に信じる」という言い方を用います。イエスのことばとあかしを受け入れるとき、わたしたちはイエス「を信じ」ます。イエスは真実なからだからです（ヨハネ6：30参照）。イエスを生活の中に個人的に受け入れ、イエスに身をゆだね、愛をもってイエスに近づき、イエスの後に従って歩むとき、わたしたちはイエス「に信じ」ます（ヨハネ2：11、6：47、12：44参照）。

わたしたちがイエスを知り、受け入れ、イエスに従うことができるようにするために、神の子はわたしたちの肉をとりました。こうして彼は、その時間における歩みを通して、人間

的なしかたでも御父を見ることになりました。キリスト教信仰は、みことばの受肉とからだの復活への信仰です。それは、わたしたちの歴史の中に歩み入るほど近づいてくださった神への信仰です。ナザレのイエスにおいて人となった神の子への信仰は、わたしたちを現実から引き離すどころか、むしろ、現実の深い意味を悟り、神がどれほどこの世を愛し、たえずご自身へと導いてくださるかを見いだせるようにしてくれます。ここからキリスト信者は、ますます熱心に地上の道を歩むようになるのです。

信仰による救い

19 使徒パウロは、このようにイエスの物の見方にあずかることから出発して、その著作の中で信仰生活のあり方について書き残しました。信じる者は、信仰のたまものを受け入れることにより、新しい被造物へと造り変えられ、新たなあり方、すなわち、子としてのあり方を受け取り、御子のうちに子となります。イエスの経験の中でもっとも特徴的なことばである「アッバ、父よ」は、キリスト信者の経験の中心となります（ローマ8・15参照）。子としての生活である信仰生活は、人間生活の基盤をなす、根源的なたまものを認めることです。このことは聖パウロのコリントの信徒への手紙のことばの中に要約されています。「いった

いあなたのもっているもので、ただかなかったものがあるでしょうか」(一コリント4・7)。
これが、聖パウロのフアリサイ派の人々との議論の中心にあるものです。すなわち、救いは
信仰によるのか、律法のわざによるのかという議論です。聖パウロは、行いによって神の前
で義とされようと望む人々の態度を拒絶します。彼らは、たとえおきてに従い、よいわざを
行っているとしても、自分自身を中心としており、いつくしみは神から来ることを認めませ
ん。このように振る舞い、自らが義の源泉となろうとする人は、やがて自らの義を使い果た
し、律法を忠実に守り続けることもできなくなります。彼は自らのうちに閉じこもって、主
からも他の人々からも離れます。そのため、彼の人生はむなしものとなり、そのわざは実
を結びません。水から離れたところにある木と同じです。聖アウグスティヌスはこのことを
簡潔かつ的確なことばで言い表しています。「あなたを造ったかたに背いて、自らに投じよ
うとしてはなりません (Ab eo qui fecit te noli deficere nec ad te)」⁽¹⁵⁾。人は、神から遠ざかろうと考え
るとき、自分も生活もうまういかなくなります(ルカ15・11―24参照)。救いの始まりは、自ら
に先立つもの、根源的なたまものに心を開くことです。このたまものが、人生を肯定し、い
のちを守ってくれるのです。このような根源的なたまものに心を開き、それを認めることに
よって初めて、わたしたちは造り変えられ、救われ、人生は実り豊かなものとなり、よい実

を結びます。信仰による救いは、神のたまものが先立つことを認めることです。聖パウロが要約しているとおります。「あなたがたは、恵みにより、信仰によって救われました。このことは、自らの力によるのではなく、神のたまものです」(エフェソ2・8)。

20 信仰による新しい物の見方は、キリストを中心としています。キリストへの信仰がわたしたちを救います。なぜなら、キリストに結ばれることにより、人生は徹底的に愛へと開かれるからです。この愛はわたしたちに先立ち、わたしたちを内側から造り変えます。それはわたしたちのうちで、わたしたちとともに働きます。このことは異邦人の使徒による申命記の解釈から明らかにされます。この解釈は旧約のもっとも深い意味に根ざしています。モーセは、民に向かって、神の戒めは難しすぎるものでもなく、遠く及ばないものでもないといっています。「だれかが天に昇り、わたしたちのためにそれを取って来てくれれば」とも、「だれかが海のかなたに渡り、わたしたちのためにそれを取って来てくれれば」ともいう必要はありません(申命記30・11―14参照)。聖パウロは、このような神のことばの近さは、キリスト信者におけるキリストの現存のことだと解釈します。「『心の中で「だれが天に上るか」というてはならない』。これは、キリストを引き降ろすことにほかなりません。また、『だれが底

なしの淵に下るか」といってもならない』。これは、キリストを死者の中から引き上げるこ
とになります」(ローマ10・6―7)。キリストは地上に降り、死者の中から復活しました。神
の子は、受肉と復活により、人間の歩みの全体を引き受け、聖霊を通じてわたしたちの心に
住まわれます。信仰は知っています。神がわたしたちに近づいてくださったことを。キリス
トが偉大なたまものとしてわたしたちに与えられたことを。そして、このたまものが、わた
したちを内側から造り変え、わたしたちのうちに住み、わたしたちに光を与えてくれること
を。この光は、人生の起源と目的、人間の歩む道全体を照らします。

21 こうしてわたしたちは、信仰がわたしたちにもたらす新しさを理解することができま
す。信じる者は愛によって造り変えられます。信じる者は信仰のうちにこの愛に心を開きます。
そして自分に与えられたこの愛への開きによって、人生は自分を越えたところへと広げられ
ます。聖パウロはこういうことができました。「生きているのは、もはやわたしではありません
せん。キリストがわたしのうちに生きておられるのです」(ガラテヤ2・20)。彼はまたこう勧
めます。「信仰によってあなたがたの心のうちにキリストを住まわせてくださるように」(エ
フェソ3・17)。信仰によって、信じる者の「自我」は広げられます。それは、他なるかたが

住まわれるからです。他なるかたのうちに生きるようになるからです。こうして人生が他なるかたへと広げられるからです。ここに聖霊の働きが見いだされます。キリスト信者はイエスの目、イエスの思い、イエスの子としての態度をもつことができます。なぜなら、キリスト信者はイエスの愛にあずかるからです。この愛こそが聖霊です。そしてこの愛のうちに、わたしたちはある意味でイエスご自身の物の見方を与えられます。愛のうちにキリストにかたどられることがなければ、またわたしたちの心に注がれた（ローマ5・5参照）聖霊がともにいてくださらなければ、「イエスは主である」と告白することはできないのです（二コリント12・3参照）。

信仰の教会的な形態

22 こうして信者の生活は、教会生活となります。聖パウロはローマのキリスト者にあてて、すべての信じる者は、キリストに結ばれて一つのからだを形づくっていると述べ、自分を過大に評価してはならないと勧めます。むしろ各人は「神が各自に分け与えてくださった信仰の度合いに応じて」（ローマ12・3）評価すべきです。信じる者は、自分たちが告白する信仰に基づいて自分を見つめることを学びます。彼は、キリストの姿という鏡のうちに、自らが

実現すべき模範を見いだすのです。キリストはすべての信じる者をご自分のもとに集め、ご自分のからだとします。それと同じように、キリスト信者は、このからだのうちに、キリストとの、また信仰における兄弟との根源的な関係において、自らを理解します。からだというイメージは、信じる者が匿名の全体の一部、大きな歯車の一要素にすぎないといおうとしているではありません。むしろそれは、キリストと信じる者との、またすべての信じる者どうしの、生きた一致を強調しています（ローマ12・4―5参照）。キリスト信者は「一つ」（ガラテヤ3・28参照）ですが、それぞれの個性が失われるわけではありません。他者に仕えることを通じて、各人は最高度に自分らしくなっていくのです。そこから、なぜこのからだの外で、すなわち、キリストにおける教会の一致の外で、――ローマーノ・ゲアルディーニ（一八八五―一九六八年）のことばを用いるなら――「世に対するキリストの完全なまなざしの歴史における担い手」⁽¹⁶⁾である教会の外では、信仰が自らの「基準」と、平衡と、自分を支えるのに必要な場を失ってしまうかが分かります。信仰は必然的に教會的な形態をとります。信仰は、信じる者の具体的な交わりである、キリストのからだの中で告白されるからです。このような教会という場から、信仰は一人ひとりのキリスト信者の心をすべての人に向けて開きます。キリストのことばは、それをひとたび聞くなり、自らの力によって、キリスト信者

の中でこたえに変わります。それは、言い表されることば、信仰告白となるのです。聖パウロはいいます。「人は心で信じ……口で公に言い表して救われるのです」(ローマ10・10)。信仰は私的なものでも、個人的な思想でも、主観的な意見でもありません。むしろ信仰は聞くことから生まれ、言い表され、告知となることを目指します。実際、「聞いたことのないかたを、どうして信じられよう。また、のべ伝える人がなければ、どうして聞くことができよう」(ローマ10・14)。信仰は、受けたたまものにより、人をキリストへと引き寄せる愛によって、キリスト信者の中で働きます(ガラテヤ5・6参照)。そして、完成の時まで歴史を旅する教会の歩みに加わられます。このように造り変えられた人に対して、新しい物の見方が開かれ、信仰はその目の光となるのです。

第二章 信じなければ、あなたがたは理解しない（イザヤ7・9 参照）

信仰と真理

23 「信じなければ、あなたがたは理解しない」（イザヤ7・9 参照）。ヘブライ語聖書のギリシア語訳、すなわち、エジプトのアレクサンドリアで作られた七十人訳は、預言者イザヤが王アハズに述べたことばをこのように訳します。こうして真理の認識という問題が、信仰の中心に位置づけられます。しかし、ヘブライ語のテキストは別のことを述べています。そこでは預言者は王にこういいます。「信じなければ、あなたがたは確かにされない」。ここでは「信じる (aman)」という動詞の二つの形に基づくことば遊びが行われています。すなわち「あなたがたは信じなさい (taaminu)」と「あなたがたは確かにされる (te'amenu)」です。敵

の力を恐れた王は、巨大なアッシリア帝国との同盟によって安全を求めようとします。そのとき預言者は王に、イスラエルの神という、揺るぐことのないまことの岩のみを信頼するよう命じます。神は信頼の置けるかたなので、神を信じ、神のことばの上に自らの安定を築くことは理にかなっています。後にイザヤはこの神を、二度、「真実の（アーメン）神」（イザヤ65・16参照）と呼びます。神は、契約を忠実に守る、揺るぎない基盤だからです。聖書のギリシア語訳は、「確かにされる」を「理解する」と訳すことにより、テキストに大幅な改変を加えたと考えられるかもしれませんが。神に信頼するという聖書の意味を、理解するというギリシア的な意味に移行させているからです。しかし、この翻訳は、確かにヘレニズム文化との対話の影響を受けているとはいえ、ヘブライ語テキストの深い意味とかけ離れたものではありません。実際、イザヤが王に約束した堅固な基盤は、神のわざと、神が人間生活とご自分の民の歴史に与えた一貫性の理解から得られるのです。預言者は王とわたしたちに勧めます。主の道を悟り、神の忠実のうちに、世々を支配する知恵の計画を見いだしなさいと。聖アウグスティヌスは『告白』の中で、真理について述べる際に、この「理解する」と「確かにされる」の統合について論じます。真理とは、揺るぎなく立つために、より頼めるものです。「そのときわたしはあなたにおいて、その真理においてしっかりと立ち、かためられ

るでしょう¹⁷。文脈から分かるとおり、聖アウグスティヌスは、神という信頼の置ける真理は、聖書で語られるように、歴史における神の忠実な現存であり、時間を支え、人間の分散した日々をまとめる力だということを示そうとしています¹⁸。

24 このように読むなら、イザヤのテキストは一つの結論を導きます。人間は知ることを必要としています。真理を必要としています、なぜなら、真理がなければ、人間は立っていることも、前に進むこともできないからです。真理を欠いた信仰は、救いをもたらしません。わたしたちの歩みを確かなものとしません。それは美しいおとぎ話、幸福への望みの投影であり、自分を偽りでもしないかぎり、満足を与えるものではありません。さもないれば、信仰は慰めと興奮を与える崇高な感情にすぎないものとなります。それはわたしたちの移ろいやすい心や時代の変化に支配され、継続的に人生の歩みを支えることはできません。信仰がこのようなものならば、王アハズが人生と王国の安全をある種の感情にゆだねないほうが理にかなったことだったでしょう。しかし、信仰は、本来、真理と結ばれているがゆえに、王の計算を超えた、新たな光を示すことができます。信仰は、はるか遠くを見通すからです。ご自分の契約と約束に忠実なためである、神のわざを悟るからです。

25 信仰と真理のつながりを思い起こすことは、現代において、これまでに増して必要です。なぜなら、わたしたちは真理の危機の時代を生きているからです。現代文化においては、しばしば科学技術の真理だけを真理として受け入れる傾向があります。人間が自然科学によって築き、評価することのできるものだけが真理です。役に立つもの、生活をより便利で快適にするものが真理です。現代では、これだけが確実な真理のように思われています。これだけが、他者と共有し、議論と共同作業の基盤にできる真理であるかのように思われています。他方で、個人の真理も存在するように思われます。この真理は、各人が心で感じることへの誠実さに基づくものの、個人にのみ妥当し、共通善に奉仕するために他者に提示できるものではありません。偉大な真理、すなわち、個人生活についても社会生活についても説明できるような真理には、疑惑の目が向けられます。人々はこう問いかけます。このような真理は、二十世紀の強大な全体主義が示した真理ではなからうか。自らの世界観を押しつけ、個人の具体的な生活を破壊した真理ではなからうかと。そこで相対主義だけが残されます。相対主義においては、普遍的な真理についての問い——それは究極的には神についての問いです——はもはや興味を引きません。このような観点から見ても、宗教と真理のつながりが廃棄さ

れたのは当然です。このようなつながりこそが、同じ信仰をもたない人を抑圧しようとする狂信主義の基盤だと考えられたからです。このことに関連して、わたしたちは現代世界における深刻な忘却について語ることができます。実際、真理への問いは、記憶への問いです。それも深い記憶への問いです。なぜなら、記憶はわたしたちに先立つものにかかわり、そこから、自分たちの小さく限定された「自我」を超えて、わたしたちを一致させることができます。それは万物の起源への問いです。わたしたちはこのような起源の光に照らされて、共通の歩みの目的と意味を見いだすことができます。

真理と愛の認識

26 こうした状況の中で、キリスト教信仰は、正しい真理の認識方法に関して、共通善に奉仕することができるのでしょうか。この問いに答えるために、わたしたちは信仰に固有の認識について考察する必要があります。聖パウロのことがわたしたちの助けとなります。パウロはいいます。「人は心で信じ」（ローマ10・10）ます。聖書において、心は人間の中心です。そこでは人間のあらゆる次元がかかわり合います。肉体と精神。人格の内面と世界や他者への開き。知性と意志と感情です。心がこれらの次元をすべてまとめることができるのは、心

が、わたしたちが真理と愛へと開かれ、これらに深く触れられ、造り変えられる場所だからです。信仰は、人が愛に開かれれば開かれるほど、その人の全体を造り変えます。このような信仰と愛のかかわり合いから、信仰に固有の認識のあり方と、この認識がもつ、確信をもたらしわたしたちの歩みを照らす力が理解できます。信仰は、愛に結ばれば結ばれるほど、愛が光をもたせばもたすほど、深く認識します。信仰の理解は、神の大いなる愛を受け入れるときに生まれます。神の愛はわたしたちを内側から造り変え、現実を見るための新たな目を与えるからです。

27 哲学者ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタイン（一八八九―一九五一年）が信仰と確信の結びつきを説明した方法はよく知られています。ウィトゲンシュタインによれば、信仰は恋愛体験に似ています。それはある意味で主観的なもので、万人に妥当する真理として提示することができません。⁽¹⁹⁾ 実際、現代人は、愛の問題が真理にかかわるとは考えません。今日、愛は不安定な感情の世界とかかわる体験で、真理とは無関係だと思われています。

しかし、これは本当に愛についての適切な言い方でしょうか。実際には、愛は、移ろいゆく感情にすぎないものではありません。確かに愛はわたしたちの感性とかかわりますが、そ

れは、愛する人へと心を開き、「自我」に閉じこもった状態から出て、他者へと向かう歩みを始め、継続的な関係を築くためです。愛は、愛する人との一致を目指します。こうして、愛がどのような意味で真理を必要とするかが明らかになります。愛は、真理に根ざしているときに初めて、時間を超えて持続し、つかの間の瞬間を超えて、堅固なものであり続け、共通の歩みを支えることができます。愛が真理と無関係なら、それは移り変わる感情に支配され、時間の試練を乗り越えられません。これに対して、真の愛は、わたしたちの人格のあらゆる要素を一つにまとめ、大いなる完全な人生へと向かう新たな光となります。真理を欠くなら、愛は堅固なきずなを築くことができません。「自我」を孤立から連れ出すことも、移ろいゆく瞬間から解放して、人生を築かせ、実りをもたらすこともできません。

愛が真理を必要とするなら、真理も愛を必要とします。愛と真理を互いに切り離すことはできません。愛がなければ、真理は、人々の日々の生活にとって、冷たく、非人格的で、抑圧的なものとなります。わたしたちが探求する真理、すなわち、わたしたちの歩みに意味を与えてくれる真理は、愛がわたしたちに触れることにより、わたしたちを照らします。愛する者は、愛が真理の体験であることが分かります。愛がわたしたちの目を開き、愛する者との一致のうちに、現実全体を新しいしかたで見させてくれることが分かります。この意味で、

聖大グレゴリオは「愛とはまさに知ることである (amor ipse notitia est)」⁽²⁰⁾、すなわち、愛はそれ自体として、新たな論理を伴う認識であると述べたのです。愛は世界を関係のうちに見ることで、それは共通の認識となります。他者の見方によって見ることに、すべてのものを共通に見るようになります。中世のサン＝ティエリのギヨーム（一〇八五頃—一二四八年）は、この伝統を継承しながら、雅歌の一節を注解しています。愛する者はその愛する者にいいます。「あなたの目は鳩の目のよう」（雅歌1・15参照）⁽²¹⁾。ギヨームは解説しています。この二つの目は、信仰に根ざした理性と愛です。この二つは一つの目になって、神の観想へと向かいます。そのとき、知解は「照らされた愛に基づく知解」⁽²²⁾となります。

28 このような認識の源泉としての愛の発見——これはすべての人の根源的な経験に属することです——は、聖書の信仰理解のうちに見いだされます。神は愛をもってイスラエルを選び、民としました。この愛を味わうことにより、イスラエルは、初めから完成に至るまでの神の計画の一貫性を理解するようになりました。この信仰の認識は、契約を結んだ神の愛から生まれたもので、歴史の歩みを照らす認識です。だから聖書の中で真理と忠実はともに歩みます。真の神は、忠実な神です。この神はご自分の約束を守り、時間の中で、ご自分

の計画を理解させていただきます。捕囚の苦しみを味わい、聖なる都への決定的な帰還を希望した預言者たちの経験を通じて、イスラエルはこう悟りました。この神の真理は、自分たちの歴史を超えて拡大する。それは、天地創造から始まり、世界の歴史全体を包括するためだと。信仰の認識は、民の特別な歩みだけでなく、初めから完成に至る、被造世界の歴史全体を照らすのです。

聞くことと見ることとしての信仰

29 信仰の認識は、忠実な神との契約と結ばれています。この神は人間と愛の関係を築き、みことばを語りかけます。そのため聖書はこの認識を聞くこととして示します。それは聴覚と関連づけられるのです。聖パウロが用いた定式は、古典的なものとなりました。「信仰は聞くことによる (fides ex auditu)」(ローマ10・17)。ことばと関連づけられた認識は、つねに個人的な認識です。この認識は、声に気づき、自由にこの声に心を開き、従順にその声に従います。そのため聖パウロは「信仰による従順」(ローマ1・5、16・26参照⁽²³⁾)について語りました。さらに信仰は、時間の経過とも結ばれた認識です。ことばは、それを発するため時間要するからです。それは弟子として従うことによって初めて学ぶことのできる認識です。

聞くことは、認識と愛のつながりを示す助けとなります。

真理の認識に関して、聞くことが見ることと対立させられ、見ることはギリシア文化に特有のものだといわれることがあります。もしも光が、人間がつねにそこがれる、すべての事物の観照を可能にするなら、自由の余地はなくなります。光は天から降^{くだ}って直接目に達し、目が応答することを要求しないからです。光はまた、人間がその中で喜び、悲しむ、具体的な時間と切り離された、静的な観照を命じるようにも思われます。こうした考え方に基づいて、聖書的な認識方法が、ギリシア的な認識方法と対立させられます。ギリシア的な認識方法は、現実の包括的な把握を追求するので、認識を見ることが結びつけるというのです。

しかし、このような対立図式が聖書の語ることに対応しないことは明らかです。旧約は認識の二つの種類を組み合わせます。神のことばを聞くことは、神の顔を見たいという望みと結びついているからです。そこから、ヘレニズム文化との対話が發展することが可能となりました。この対話は聖書の中心に属しているのです。聞くことは、個人的な呼びかけと従順とともに、真理が時間の中で示されることを明らかにします。見ることは、歩み全体の完全な展望を与え、神の大きな計画の中に自分を位置づけることを可能にします。このような展望がなければ、わたしたちは、未知の全体の中の限られた断片を並べることしかできませ

ん。

30 信仰の認識のいわば道具である、見ることに聞くことのきずなは、ヨハネによる福音書の中できわめて明らかに示されます。第四福音書にとって、信じるとは、聞くことであると同時に、見ることです。信仰における聞くことは、愛に固有の認識方法として示されます。それは個人的に聞くことであり、声を聞き分け、よい羊飼いの声を認めることです（ヨハネ 10・3—5 参照）。このように聞くことは、最初の弟子の場合のように、弟子として従うことを要求します。彼らは「それを聞いて、イエスに従った」（ヨハネ 1・37）のです。一方で信仰は見ることも結ばれています。イエスのしるしを見るのが信仰に先立つ場合があります。ラザロの復活の後、「イエスのなさったことを目撃し……イエスを信じた」（ヨハネ 11・45）ユダヤ人の場合がそれです。信仰が深く見ることに導く場合もあります。「もし信じるなら、神の栄光が見られる」（ヨハネ 11・40）。最後に、信じることに見ることはかかわり合います。「わたしを信じる者は……わたしを遣わされたかたを信じるのである。わたしを見る者は、わたしを遣わされたかたを見るのである」（ヨハネ 12・44—45）。このような聞くこととの結びつきによって、見ることはイエスに従うこととなります。そして信仰は、見つめる

歩みとなります。この見つめる歩みにおいて、目は深みを見ることに慣れていきます。こうして復活の朝、まずヨハネは、まだ暗いうちに出かけ、空の墓を目の当たりにして「見て、信じた」(ヨハネ20・8)のでした。ついでマグダラのマリアは、「イエスを見た」(ヨハネ20・14)後、イエスにすがりつこうとしますが、イエスが父のもとに行くのを仰ぎ見るよう命じられます。最後に、同じマグダラのマリアが、弟子たちに完全な告白を行います。「わたしは主を見ました」(ヨハネ20・18)。

どうすれば聞くことと見ることを一つにまとめることができるでしょうか。それは、イエスという具体的な人格から出発することによって可能です。イエスは、わたしたちが見、また聞くかただからです。イエスは肉となったみことばです。わたしたちはその栄光を仰ぎ見ました(ヨハネ1・14参照)。信仰の光は、み顔の光です。わたしたちはこのみ顔のうちに御父を見ます。実際、第四福音書において、信仰が悟る真理は、御子において、すなわち御子の肉と地上でのわざにおいて御父が現されたことです。この真理を、イエスの「光輝く生涯」と呼ぶことができます。⁽²⁴⁾つまり、信仰の認識は、単に内的な真理を見つめるようにわたしたちを招くだけではありません。信仰がわたしたちに示す真理は、キリストとの出会いを中心とする真理です。キリストの生涯を仰ぎ見ること、キリストの現存を感じることを中心

とする真理です。その意味で聖トマス・アクイナス（一二二四／一二三五—一二七四年）は、復活したキリストのからだを見た使徒たちの「目をそなえた信仰（*oculata fides*）」——目で見る信仰！——について語るのです。⁽²⁵⁾使徒たちは復活したイエスを自分の目で見て、信じました。つまり、彼らは、自分たちが見ているものの深みをのぞき込むことによって、父の右に座しておられる神の子を告白することができたのです。

31 こうして、キリストが受肉し、わたしたちと人間性を共有することを通して初めて、愛に固有の認識が完全なものとなったのです。実際、わたしたちが心を打たれ、愛するかたの内的な現存を心に受け入れるときに、愛の光は生まれます。このかたは、わたしたちが自分の神秘を認識することを可能にしてくださるからです。そこからわたしたちは、なぜ聖ヨハネが、信仰とは、聞くこと、見ることだけでなく、「触れる」ことだと述べたかが分かります。ヨハネの手紙一で彼がこう述べるとおりです。「わたしたちが聞いたもの、目で見たもの、……手で触れたものを伝えます。すなわち、いのちのことばについて」（一ヨハネ一・1）。イエスは、受肉し、わたしたちの間に来ることにより、わたしたちに触れます。そして、秘跡を通して、今日もわたしたちに触れてくださいます。こうして彼は、わたしたちの心を

造り変えることにより、わたしたちがイエスを神の子と認め、告白することをたえず可能にしてください。わたしたちは信仰によってイエスに触れ、その恵みの力を受けることができます。聖アウグスティヌスは、いやしていただくためにイエスに触れた、出血が止まらない女の箇所（ルカ8：45―46参照）を注解して、います。「心で触れること、これが信じるということである」⁽²⁶⁾。群衆はイエスの周りに押し寄せていましたが、彼らは信仰をもって個人的に触れてイエスに達するものではありません。このように触れることが、イエスの神秘、すなわち、イエスが御父を示す子であることを認識するのです。わたしたちはイエスに似せて形づくられることによって初めて、イエスを見るのにふさわしい目を与えられます。

信仰と理性の対話

32 キリスト教信仰は、神の完全な愛の真理を告げ知らせ、この愛の力へとわたしたちを開くことによって、すべての人の経験のもっとも深い中心に達します。人は愛によって光のもとに來ます。そして、光にとどまるために、愛するように招かれます。イエスのうちに示された神の愛によって現実全体を照らしたいという望みに驅られ、またこの同じ愛によって愛することを追求した初期キリスト者は、真理を渴望するギリシア世界のうちに、対話のため

のふさわしい相手を見いだしました。福音のメッセージと古代世界の哲学思想の出会い、福音がすべての民に達するための決定的な歩みとなりました。そして、信仰と理性の間の実り豊かな相互作用を促しました。この相互作用は現代に至るまで、諸世紀を通じて発展してきました。福者ヨハネ・パウロ二世は回勅『信仰と理性』の中で、信仰と理性が互いに強め合うことを示しました。²⁷ わたしたちは、イエスの愛の完全な光を見いだすとき、わたしたちのすべての愛のうちにこの光がかすかにさし込んでいることを発見し、この愛の究極目的を悟ります。同時にわたしたちは、わたしたちの愛がこの光を含んでいることに助けられて、愛の歩みが、わたしたちのための神の子の完全な奉獻を目指していることを見いだします。このような循環運動を通して、信仰の光はわたしたちの人間関係全体を照らします。こうしてわたしたちは、キリストの愛と柔和との一致のうちに人間関係を生きることができるようになるのです。

33 わたしたちは聖アウグスティヌスの生涯のうちに、真理と光にあこがれる理性の探求が、信仰の展望と統合される過程の優れた模範を見いだします。彼はこの信仰により、新たな理解を与えられたのです。まずアウグスティヌスは、見ることを強調する、ギリシアの光の哲

学を受け入れます。新プラトン主義との出会いによって、彼は光のあり方を知りました。光は天から降^{くだ}って事物を照らします。それゆえ、それは神の象徴です。こうして聖アウグステイヌスは神の超越性を理解し、すべての事物が自らのうちにある種の超越性を有していることを見いだしました。これらの超越性は、善そのものである神の善性を反映することができず。こうして彼はマニ教から解放されました。初め彼はこのマニ教を信じ、そのため善と善が互いにいつまでも争い合い、明確な区別なしに混ざり合っていると考えるようになっていたのです。神が光だという理解は、人生への新たな方向づけとともに、自分の罪と悪を認め、善へと向かう力を彼に与えました。

しかし、他方で、『告白』の中で彼自身が語っているとおり、聖アウグステイヌスの具体的な体験において、信仰への歩みにおける決定的な契機となったのは、この世を超えた神を見ることではなく、むしろ聞くことでした。彼は庭で、次のように語りかける声を聞きます。「とれ、よめ」⁽²⁸⁾。彼は聖パウロの手紙を収めた書を手に取り、ローマの信徒への手紙の13章を読みました。こうして聖書のペルソナとしての神が現れました。それは、人間に語りかけ、降^{くだ}って来て人間とともに生き、歴史の中で人間とともに歩み、そして聞き、こたえるときにご自身を現す神です。

しかし、聖アウグスティヌスは、このみことばである神と出会うことから、光と、見ることを拒むよう促されはしませんでした。彼は、イエスにおける神の愛の啓示にたえず導かれながら、聞くことと見ることという二つの方法を統合したのです。こうして彼は光の哲学を生み出しました。この哲学は、ことばに固有の相互性を受け入れるとともに、光へとまなざしを向ける自由に場を与えるものでした。自由な応答がことばと対応しているのと同じように、光は、光を反映する像の中に応答を見いだします。こうして聖アウグスティヌスは、聞くことと見ることを結び合わせながら、「内にひらめくことば」⁽²⁹⁾について語ることができました。こうして光は、いわば、ことばの光となります。なぜなら、それはペルソナのみ顔の光だからです。この光は、わたしたちを照らし、わたしたちに呼びかけ、わたしたちの顔に反映して、わたしたちの内側から輝くことを望むからです。とはいえ、歴史の断片だけでなく全体を見たいという望みは依然として残ります。この望みは終わりの時に満たされます。ヒッポの聖人がいうとおり、そのとき人は見、かつ愛するでしょう。⁽³⁰⁾それは、人が永遠に尽きることがないすべての光をもてるようになるからではありません。むしろ、人が完全な意味で光の中に歩み入るからなのです。

34 信仰に固有の、愛の光は、真理に関する現代の問いを照らすことができます。現代において、真理はしばしば個人の主観的な確実性におとしめられています。この確実性は個人生活に対してのみ妥当します。共通の真理はわたしたちを恐れさせます。わたしたちはそれを全体主義の狂信的な強制と同一視するからです。しかし、もし真理が愛の真理なら、もし真理が愛であるかたとの、また他者との個人的な出会いによって示されるなら、そのような真理は閉ざされた個人から解放され、共通善の一部となることができます。それは愛の真理なので、暴力によって強制することも、個人を抑圧することはありません。それは愛から生まれるので、心、すなわちすべての人の人格の中心に達することができます。そこから次のことが明らかとなります。信仰は狂信ではなく、むしろ、他者を尊重する共生の中で成長します。信じる者は傲慢になりません。むしろその反対に、真理は信じる者を謙虚にします。信じる者は、わたしたちが真理を所有するのではなく、真理こそがわたしたちを抱き留め、所有するのだと知っているからです。信仰の確信は、わたしたちを頑迷にするのではなく、むしろわたしたちに道を歩ませます。それは、真理をあかしし、すべての人と対話することを可能にしてくれるのです。

他方で、信仰の光は、愛の真理と結ばれているかぎり、物質的な世界と異質なものではあ

りません。愛はつねに肉体と靈魂の中で生きるからです。信仰の光はイエスの光輝く生涯から発する、受肉した光です。この光は物質をも照らし、物質の秩序に信頼し、物質の中で調和と理解の歩みがますます開かれることを知っています。こうして科学のまなざしは信仰から恩恵を受けることになります。信仰は科学者が、尽きることなく豊かな、ありのままの現実に開かれ続けているよう招きます。信仰は批判的な感覚を目覚めさせます。すなわち、研究が自らの公式に満足しないように仕向け、自然がいつそう偉大であることを悟るように助けます。信仰は、被造物の神秘に対する驚きへと招くことによって、科学研究で示される世界をますます照らすために、理性の視野を広げるのです。

信仰と神の探求

35 イエスを信じる信仰の光は、神を捜し求める人々の歩みをも照らします。そして、諸宗教の信仰者との対話にキリスト教固有の貢献を行うことを可能にします。ヘブライ人への手紙は義人のあかしについて語ります。義人たちはアブラハムとの契約が結ばれる以前から、すでに信仰をもって神を捜し求めていました。エノクについては、「神に喜ばれていたことが証明されていた」(ヘブライ11:5)といわれています。このことは信仰なしには不可能です。

なぜなら、「神に近づく者は、神が存在しておられること、また、神はご自分を求める者たちに報いてくださるかたであることを、信じていなければならないからです」（ヘブライ11・6）。ここから次のことが分かります。宗教的人間の歩みは、神を認めることを通ります。

この神は、彼を心にかけるかたで、見いだすことのできないかたではありません。ご自分と出会わせること以上に大きな、神を捜し求める人に神が与える報いがあるでしょうか。さらに昔の人に、アベルがいます。アベルの信仰もたたえられます。そのため神は、アベルのささげもの、すなわち群れの初子ういごのささげものを喜びました（ヘブライ11・4参照）。宗教的人間は神のしるしを見いだそうとします。人生の日常的な経験のうちに。季節の移り変わりのうちに。大地の実りのうちに。また宇宙の運動全体のうちにです。神は光です。ですから、誠実な心で神を捜し求める人は神を見いだすことができるのです。

こうした探求の模範となるのが、星に導かれてベツレヘムにやって来た、占星術の学者たちです（マタイ2・1―12参照）。彼らにとって、神の光は歩むべき道として、見いだすべき道へと導く星として示されます。こうして星は、わたしたちの目に対する神の忍耐について語ります。目は神の輝きに慣れなければならないからです。宗教的人間は旅人です。彼は進んで導かれ、神を見いだすために自分自身から出て行かなければなりません。神はつねに人を

驚かせるかただからです。このように神が人間の目を大事にすることは、次のことを示します。人間が神に近づくと、人間の光は、星の光が夜明けに消えてしまうように、神のとてつもない光の前で消えてしまうのではなく、根源的な火に近づけば近づくほど、いつそう輝きます。鏡が光を反射するのと同じです。イエスが唯一の救い主であるという、キリスト教の信仰告白は、神の光がすべて、キリストとその「光輝く生涯」に集中することを述べたものです。キリストのうちに歴史の起源と完成が示されるからです。⁽³¹⁾ いかなる人間経験であれ、人間の神への歩みであれ、この光が受け入れ、照らし、清めることができなようなものはありません。キリスト信者は、キリストの光の開かれた輪にいつそう深く入れれば入るほど、すべての人の神への道をいつそうよく理解し、それに同伴できるようになるのです。

信仰は道として示されるため、それは、信仰者ではないものの、信じることにあこがれ、たえず探求し続ける人々の生活にもかかわります。誠実な心で愛に心を開き、自分が見いだすことのできた光をもって歩み出しているかぎり、彼らはすでに、それとは知らずに、信仰への道を歩んでいます。彼らは神が存在するかのように行動しようとしています。それは、時として、日常生活の中で確かな方向づけを見いだすために神の重要性を認めるからであり、あるいは、暗闇の中で光へのあこがれを感じるからです。しかしそれはまた、人生の偉大さと

すばらしさを感じるときに、神がいるなら人生をいっそう偉大なものにするに違いないと見抜くからでもあります。リヨンの聖イレネオ（二三〇／一四〇―二〇〇年頃）はいいます。アラハムは、神の声を聞く前に、すでに「心の傾きと促しのままに、神はどこにいますかと全地を探して廻った」。それで「ひとりぼっちで静かに神を探し求めているこの人を、その神があわれみ⁽³²⁾」ました。善を行うために歩み出す人はだれでも、すでに神に近づき、神の助けに支えられています。なぜなら、わたしたちが完全な愛に向けて歩むとき、神の光の力がわたしたちの目を照らすからです。

信仰と神学

36 信仰は光です。だから信仰は、わたしたちが信仰へと歩み入り、信仰が照らす地平をますます探求するよう招きます。それは、わたしたちが愛するものをいっそうよく知ることができるようになるためです。キリスト教神学はこのような望みから生まれます。ですから、次のことは明らかです。信仰なしに神学は不可能です。また、神学は信仰の歩みそのものの一部です。信仰は、キリストの神秘のうちに頂点に達する神の自己啓示をより深く理解しようとするからです。そこから帰結する第一のことはこれです。神学は、実験科学において

行われるような、分析し、認識する理性の努力以上のものです。神を対象化することはできません。神は、人格どうしの関係の中で、自らを知らせ、示す、主体です。正しい信仰は、神から来る光へと開かれるように理性を方向づけます。それは、理性が、真理への愛に導かれて、より深く神を認識できるようになるためです。中世の偉大な教師や神学者たちが示すとおり、信仰の学としての神学は、神のご自分についての認識の分有です。それゆえ神学は、単に神について語ることではなく、何よりもまず、神が語りかけることば、すなわち神がご自身について告げることばをより深く受け入れ、理解しようと努めることです。神は永遠の交わりの対話であり、この対話に人間を導き入れるからです。⁽³⁾それゆえ神学には、神に「触れて」いただく謙虚さが必要です。神学は、神秘であるかたの前で自らの限界を認めながら、理性に固有の規律をもって、この神秘のはかりしれない豊かさを探究しようと努めます。

さらに神学は、信仰の教会的な形態も共有します。神学の光は、教会という信じる主体の光です。このことはまず次のことを意味します。神学はキリスト信者の信仰に奉仕しなければなりません。へりくだりのうちに、すべての人、とくにもっとも素朴な人の信仰を守り、深めなければなりません。他方で、神学は信仰によって生かされるので、教皇と教皇との交わりのうちにある司教の教導職を、非本質的で、自らの自由を制約するものと考えず、むしろ

ろその反対に、自らの内的かつ本質的な要素とみなすべきです。教導職は根源的な源泉との接触を保障し、それゆえ、欠けることのないしかたでキリストのみことばから水をくんでい
るという確信を与えるからです。

第三章 わたしがあなたがたに伝えたのは、わたしも受けたものです

(一コリント15・3参照)

わたしたちの信仰の母である教会

37 神の愛に心を開き、そのみ声を聞き、その光を受けた人は、このたまものを自分だけにとどめておくことができません。信仰は聞くこと、また見ることで、ことばと光としても伝えられます。聖パウロはコリントの信徒にあてた手紙の中で、まさにこの二つのイメージを用います。まず、彼はいいます。『わたしは信じた。それで、わたしは語った』と書いてあるとおり、わたしたちも信じ、それだからこそ語ってもいます(二コリント4・13)。受けたことばは、こたえとなり、告白となります。こうしてそれは他の人にも響きわたり、彼

らを信じるように招きます。他方で、聖パウロは光にも言及します。「わたしたちは皆、……鏡のように主の栄光を映し出しながら、栄光から栄光へと、主と同じ姿に造り変えられていきます」(二コリント3・18)。それは顔から顔へと輝く光です。モーセが神と語った後、神の栄光がその顔に輝いていたのと同じです。「神は、わたしたちの心のうちに輝いて、イエス・キリストのみ顔に輝く神の栄光を悟る光を与えてくださいました」(二コリント4・6)。イエスの光は、鏡に映るように、キリスト信者の顔の上に輝きます。こうしてこの光は広まり、わたしたちにまで達します。それによってわたしたちも見ることにあずかり、この光が他の人に反射できるようになります。それは、復活祭の典礼の中で、復活のろうそくの光が他の多くのろうそくに火をともしると同じです。信仰は、いわば、人が人に触れるようなかたちで伝えられます。炎が別の炎に移るのと同じです。キリスト信者は貧しさの中で、種を蒔^まきます。この豊かな種は大きな木になり、その実りで世界を満たすことができるようになるのです。

38 信仰の伝達は、あらゆる場所のすべての人を輝かすだけではなく、時間軸を貫いて、世代から世代へと行われます。信仰は、歴史の中で起こる出会いから生まれ、わたしたちの時

間における歩みを照らします。だから信仰を世々に伝えなければならぬのです。途切れることのないあかしの連鎖を通じて、イエスのみ顔はわたしたちに到達します。このことはどのようにして可能となるのでしょうか。世紀を超えて、どうして「真のイエス」に触れたと確信できるのでしょうか。人間が孤立した個人のままで、単なる個々人の「自我」から出発し、自己のうちに認識の確実性を見いだそうとするなら、確信をもつことは不可能です。わたしはるか昔に起きたことを自分で見ることはできません。しかし、人間の認識方法はこれだけではありません。人格はつねに関係の中で生きています。人間は他者に由来し、他者に属しています。人間の生涯は他者との出会いの中で偉大なものとなります。認識そのものも、自己意識ですら、関係的です。それはわたしたちに先立つ他者と結ばれているからです。第一に、わたしたちにいのちと名前を与えてくれた両親です。わたしたちはことばによって人生と現実の意味を解釈します。この言語そのものも、他者を通じてわたしたちにもたらされます。言語は他者の生きた記憶の中に保存されているからです。自己認識は、より大きな記憶に参加することによって初めて可能になります。同じことが信仰にもいえます。信仰は人間の認識方法の完成だからです。信仰の過去、すなわち、世に新しいいのちを生み出したイエスの愛のわざは、他者、すなわち証人の記憶によってわたしたちに達します。この記憶

は、教会という、記憶する唯一の主体のうちに生き生きと保存されているからです。教会は、信仰の言語を語ることをわたしたちに教えてくれる母です。聖ヨハネは福音書の中でこのことを強調するために、信仰と記憶を結びつけたうえで、この二つを聖霊のわざと関連づけます。聖霊は、イエスがいうとおり、「わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる」(ヨハネ14・26)からです。愛は霊であり、教会の中に住まわれます。この愛は、あらゆる時代を一つに結び合わせ、わたしたちをイエスと同時代の者とします。こうして愛は、わたしたちの信仰の歩みを導きます。

39 独りで信じることは不可能です。信仰は、単に信じる者の内面に浮かぶ個人的な思想ではありません。それは信じる者の「われ」と神の「汝」^{なんじ}の間の、すなわち自律した主体と神の間の排他的な関係でもありません。信仰はその本性上、「わたしたち」へと開かれており、また、つねに教会の交わりの中で営まれます。洗礼式で用いられる対話形式の信仰宣言は、このことをわたしたちに思い起こさせてくれます。信仰は招きへの応答として表されます。わたしたちはこの招きのことばを聞かなければなりません。それはわたしに由来するものではないからです。だから信仰は対話の一部であって、個人から生まれる純粋な告白だけでは

ありえませんが。一人称で「わたしは信じます」とこたえることができるのは、わたしが大きな交わりに属しているからです。「わたしたちは信じます」ともいえるからです。このように教会という「わたしたち」へと開かれていることは、神の愛そのものへと開かれていることによって生じます。神は、単に父と子の関係、「われ」と「汝」の関係ではなく、霊において「わたしたち」でもあります。それはペルソナの交わりです。だから信じる者は独りきりではないのです。だから信仰は広められ、他の人を喜びへと招くことを目指すのです。信仰を受けた人は、自分の「自我」が広がり、自らのうちに人生を豊かにする新しい関係が生まれたことを見いだします。テルトゥリアヌス（一六〇以前―二三〇年以降）は洗礼志願者について語る中で、このことを力強く表現します。「洗礼の浴槽から新しく誕生した」者は、母の家に迎え入れられ、新しい家族の一員となって、手を広げて、兄弟とともにわたしたちの父に祈るのです。⁽³⁴⁾

秘跡と信仰の伝達

40 教会は、あらゆる家庭と同様、その子らに自らが記憶していることを伝えます。その際、何ものも失われず、むしろ反対に、信仰の遺産がすべてますます深められます。このような

ことがどうしてできるのでしょうか。聖霊の助けにより教会の中に保存された使徒伝承を通じて、わたしたちは基盤となる記憶に生き生きと触れることができます。第二バチカン公会議が述べるとおり、使徒たちが伝えたことは「神の民が聖なる生活を営み信仰を増すためにあずかって力のあるすべてのものを含んでいる。このようにして教会は、その教えと生活と礼拝とにおいて自らのありようのすべてと自らの信じることのすべての永続を図り、あらゆる世代に伝えるのである」⁽³⁵⁾。

実際、信仰は、あかしと伝達を行うための場を必要とします。この場は、伝えられることに対応し、それと釣り合うものでなければなりません。純粹に教理的・思想的な内容を伝えるためなら、書物や、口頭でメッセージを反復するだけで十分でしょう。しかし、教会の中で伝えられること、教会の生きた聖伝によって伝えられることは、生きた神との出会いから生まれる、新しい光です。この光は人格の中心である心に触れ、知性と意志と感情に働きかけ、神また他者との生きた交わりの関係へと心を開きます。このような完全な伝達を行うための特別な手段があります。この手段は、肉体と精神、内面性と関係を含めた全人格に働きかけます。それが、教会の典礼の中で祝われる秘跡です。秘跡によって、受肉した記憶が伝えられます。すなわち、人生の場所と時間、あらゆる感覚と結びついた記憶です。秘跡によ

って、人格は、生きた主体の一員として、共同体の關係のつながりへと結びつけられます。そのため、確かに秘跡は信仰の秘跡ですが、³⁶信仰も秘跡的な構造をもっているといわなければなりません。信仰の覚醒は、人間生活とキリスト教的な生活における新たな秘跡的意味の覚醒から始まります。目に見える物質的なものは、永遠の神秘へと開かれていることが示されるのです。

41 信仰の伝達は、何よりもまず洗礼によって行われます。次のように思われるかもしれませんが。洗礼は、信仰告白を象徴的に表すもので、しるしと動作が必要な人のための教育手段であり、要するに大して重要なものでないと。洗礼に関して聖パウロが述べたことばは、そうではないことを思い起こさせてくれます。彼はいいいます。「わたしたちは洗礼によってキリストとともに葬られ、その死にあずかるものとなりました。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しいのちに生きるためなのです」(ローマ6・4)。わたしたちは洗礼によって新しい被造物となり、神の養子となります。使徒は続けていいいます。キリスト信者は「教えの規範 (typos didachés)」をゆだねられ、それに心から従うようになります(ローマ6・17参照)。人は洗礼によって、告白すべき教えと、

具体的な生き方も与えられます。この生き方は、人格全体を用いることを要求し、その人を善に向けて歩ませます。彼は新しい場に移され、新しい環境を与えられます。すなわち、教会における新しい共通の生き方です。こうして洗礼は次のことを思い起こさせます。信仰は、孤立した個人が行うわざでもなければ、人が自分の力のみを頼みとして果たせる行為でもありません。むしろ信仰は、受け取るべきものです。そのために、神のたまものを伝える教会の交わりに歩み入らなければなりません。だれも自分に洗礼を授けるではありません。だれも独りで生まれて来るのではないのと同じです。わたしたちは洗礼を受けるのです。

42 わたしたちをこの新しい「教えの規範」へと導き入れる、洗礼を構成する要素はいかなるものでしょうか。まず、父と子と聖霊という三位一体の神の名が、洗礼志願者の上に祈り求められます。こうして、最初から信仰の歩みの要約が示されることになります。神はアブラハムを召し出し、アブラハムの神と名乗ることを望みました。神はモーセにみ名を現しました。神はわたしたちに御子をゆだねることにより、み名の神秘を完全に現しました。この神が、受洗者に新たな子としての身分を与えます。そこから、洗礼で行われる、浸水という行為の意味が分かります。水は死の象徴です。それはより大きな「わたし」へと開かれるた

めに、「わたし」からの回心の道を通るよう招きます。同時に水は、いのちの象徴でもあります。すなわちそれは、キリストに従うことにより、キリストの新しいいのちへと生まれ変わるための母胎の象徴でもあります。こうして浸水を通じて、洗礼は、信仰の受肉的な構造を語ります。キリストのわざは、一人ひとりの現実の中でわたしたちに触れ、わたしたちを徹底的に造り変え、神の養子とし、神の本性にあずからせます。こうして洗礼はわたしたちの關係性全体と、世界と宇宙におけるわたしたちの具体的な状況を変化させ、それを神ご自身の交わりのいのちへと開きます。洗礼がもつこのようなわたしたちを変容させる力は、入信準備期の重要性を理解する助けとなります。入信準備期は、今日、多くの成人が洗礼の秘跡に近づくようになった、古くからキリスト教が根づいた社会においても、新しい福音宣教にとって特別な重要性を帯びています。入信準備期は、生活全体をキリストにおいて変容させるために、洗礼を準備する道なのです。

洗礼と信仰のつながりを理解するうえで、預言者イザヤのことばを思い起こすのが助けになります。このことばは古代のキリスト教文書の中で洗礼と結びつけられました。「その高い塔は堅固な岩。……水は絶えることがない」(イザヤ33・16)⁽³⁷⁾。死の水から救い出された受洗者は、「堅固な岩」の上に立つことができます。彼はより頼める堅い土台を見いだしたから

です。こうして死の水はいのちの水に変えられます。ギリシア語テキストはこのような水を「忠実な (πίστος)」水と呼びます。洗礼の水は忠実です。なぜなら、それはイエスの愛の力に浸されながら流れるからです。イエスこそは、わたしたちの人生の歩みにとって確信の源泉なのです。

43 洗礼の構造、すなわち、わたしたちが新しい名と新しいいのちを与えられる、新たな誕生としてのその姿は、幼児洗礼の意味と重要性を理解する助けになります。幼児は、自由な行為によって信仰を受け入れることができません。自力で信仰を告白することもできません。そのため両親と代父母が代わりに信仰を告白します。信仰は教会共同体の中で生かれます。共通の「わたしたち」へと接ぎ木されます。こうして幼児は他の人々、すなわち両親と代父母に支えられ、彼らの信仰の中に迎え入れられます。彼らの信仰とは、教会の信仰のことです。このことは、受洗者の父親が洗礼式のろうそくから取る光によって象徴されます。このような洗礼の構造は、信仰の伝達における教会と家庭の協働の重要性を明らかにします。聖アウグスティヌスのことばを用いるなら、両親は、子どもたちを生むだけでなく、彼らを神のもとに導くよう招かれています。洗礼を通じて、子どもたちは神の子として生まれ変わり、

信仰のたまものを受けるからです。⁽³⁸⁾ こうして、子どもたちは、いのちだけでなく、人生の根本的な方向づけと、よい未来への確信を与えられます。この方向づけは、堅信の秘跡の中で、聖霊のしるしによつてさらに強められます。

44 信仰の秘跡的な性格は、聖体のうちに最高の表現を見いだします。聖体は信仰の貴重な糧であり、その最高の愛のわざによつて現実に現存するキリストとの出会いです。このキリストの自己奉獻がいのちを生み出します。わたしたちは聖体のうちに、信仰がその上を歩む二つの軸が交差するのを見いだします。一つは、歴史という軸です。感謝の祭儀は記念の行為であり、神秘を現在化することです。こうして、死と復活のような過去の出来事が、未来を開き、終わりの日の完成を先取りする力を示します。典礼は、救いの神秘について「今日(hodie)」ということによつて、このことを思い起こさせます。他方で聖体には、目に見える世界から目に見えない世界へと導く軸も見いだされます。わたしたちは聖体のうちに現実の深みを見ることを学びます。パンとぶどう酒はキリストのからだと血に変わります。キリストは御父へと過ぎ越す歩みのうちに現存します。この動きは、わたしたちの肉体と靈魂を、被造物全体が神における完成を目指す動きへと導き入れるのです。

45 教会は、秘跡を祝いながら、とくに信仰告白によって、自らの記憶を伝えます。信仰告白において行われるのは、抽象的な真理全体に同意を与えることだけではありません。むしろ反対に、信仰告白においては、人生全体が、生きた神との完全な交わりへの道に歩み入るのです。こういうことができます。信条において、信じる者は、自分が告白する神秘へと歩み入り、自分が告白するものによって造り変えていただくよう招かれています。このことの意味を理解するために、まず信条の内容を考えてみたいと思います。信条は三位一体的な構造をもっています。父と子は愛の霊のうちに一致しています。こうして信じる者はいいいます。存在の中心、万物のもつとも深い神秘は、神の交わりです。さらに信条はキリストへの告白も含んでいます。信条は、死んで復活し、天に上げられ、終わりの日に栄光のうちに再び来られることを待ち望むに至るまで、イエスの生涯の神秘をたどり直します。それゆえ、信条はこう語ります。この神の交わり、すなわち霊における父と子の愛の交換は、人間の歴史を包み、それを神の交わりのダイナミズムへと導くことができます。このダイナミズムの起源と究極目的は御父です。信仰を告白する人は、自分が告白する真理へと導き入れられます。自らが造り変えられ、愛の歴史に浸されなければ、信条のことばを真の意味で唱えたことに

はなりません。愛の歴史は、歴史を包み、わたしたちの存在を広げ、それを大きな交わり、すなわち、信条を唱える究極的な主体である教会の一部とするからです。信仰は生きた神との交わりの旅路です。わたしたちが信じるすべての真理は、この信仰に基づく新しいいのちの神秘を述べています。

信仰と祈りと十戒

46 教会の記憶の忠実な伝達には、あと二つの要素があります。第一は、主の祈りです。キリスト信者はこの祈りによって、キリストご自身の霊的経験にあずかり、キリストの目をもつて見始めることを学びます。光よりの光であるかた、父の独り子から出発して、わたしたちも父を知り、他の人々のうちに、神に近づこうとする望みの火をともすことができます。

第二に、同じく重要なのは、信仰と十戒のつながりです。すでに述べたとおり、信仰は、生きた神との出会いへと開かれた旅路であり、歩むべき道です。そのため、信仰の光、すなわち、わたしたちを救う神への完全な委託の光に照らされることにより、十戒はいっそう深く真理を表すようになります。十の戒めの導入のことばが示すとおりです。「わたしは……あなたをエジプトの国……から導き出した神である」(出エジプト20・2)。十戒は、「……し

てはならない」というおきての集成ではありません。むしろそれは、利己的で自分のうちに閉じこもりがちな「自我」の荒れ野から出て、神と対話し、神のあわれみに包んでいただき、そこから、このあわれみを伝えなさいという、具体的な指示です。こうして信仰は、万物の起源であり支えである神の愛を告白し、この愛に動かされて、神との完全な交わりを目指して歩みます。十戒は、感謝し、愛にこたえる道として、実行可能です。なぜならわたしたちは、信仰によって、わたしたちを造り変える神の愛の体験へと開かれるからです。この歩みは、イエスの山上の説教での教えから新たな光を与えられます（マタイ5～7章参照）。

わたしは、教会が伝える記憶の宝庫を要約する、四つの要素を述べました。信仰の告白、秘跡を祝うこと、十戒の道、そして祈りです。教会の信仰教育は、伝統的にこの四つに従って構成されています。『カトリック教会のカテキズム』もその一つです。『カトリック教会のカテキズム』は、教会が一致して、信仰の内容全体、すなわち「自らのありようのすべてと自らの信じることのすべて」⁽³⁹⁾を伝えるわざのための基本的な道具です。

信仰の唯一性と完全性

47 教会の時間と空間における唯一性は、信仰の唯一性と結ばれています。「からだは一つ、

霊は一つ……信仰は一つ」(エフェソ4・4—5)。今日、わたしたちは、共通の仕事、善意、同じ運命と目的による、人々の一致は理解できるかもしれません。しかし、同じ真理における一致を理解することはきわめて困難です。このような一致は、思想の自由や個人の自律と相いれないように思われます。しかし、愛の経験は次のことを示します。まさに愛のうちに、共通の物の見方をもつことが可能となります。なぜなら、わたしたちは愛のうちに、他者の目で現実を見ることを学ぶからです。そして、このことはわたしたちの物の見方を貧しくするどころか、豊かにするからです。神の愛に基づくまことの愛は、真理を必要とします。そして、イエス・キリストという真理を共通に仰ぎ見ることにより、この愛は堅固で深いものとなります。一つのからだ、一つの霊において、物の見方が一致すること——これも信仰の喜びです。だから聖大レオ(四〇〇頃—四六一年)はこういうことができました。「信仰は、一つでなければもはや信仰ではない」⁽⁴⁰⁾。

こうした一致の秘訣は何でしょうか。信仰が唯一なのは、まず、わたしたちが知り、告白する神が唯一だからです。信仰箇条は皆、神について語ります。それは神の存在とわざを知るための道です。そのため信仰箇条の一致は、わたしたちの考えによつて築くことのできる他の一致をはるかに凌駕します。信仰箇条の一致は、わたしたちを豊かにします。なぜなら、

それはわたしたちに伝えられ、わたしたちを一つにするからです。

信仰が唯一なのは、また、それが唯一の主に、すなわち、イエスの生涯と、イエスがわたしたちと共有する具体的な歴史に向かうからです。リヨンの聖イレネオは、グノーシス主義の異端に反駁することによって、このことを明らかにしました。グノーシス主義者はこう主張していました。信仰には二種類がある。一つは、粗野な信仰、すなわち単純な人々のもつ不完全な信仰である。それはキリストの肉体と、その神秘の観想のレベルにとどまる。もう一つは、もっと深く完全な信仰、すなわち、秘儀伝授を受けた少数者のグループだけがもつ、真の信仰である。この人々は、イエスの肉体を超えて、知性を不可知の神の神秘へと高めることができる。こうした主張は現代人をも引きつけ、その信奉者を見いだしています。この主張に対して聖イレネオはこう論じます。唯一の信仰しか存在しません。なぜなら、信仰は受肉という具体的な地点を通るからであり、神がご自分をキリストのうちに現そうと望まれた瞬間から、キリストの肉体と歴史なしで済ますことができないからです。だから、「信仰を詳しく語れる人」と「わずかしか語れない人」の間に、すなわち、力のある人となない人の間に、違いはありません。前者が信仰を大きくすることも、後者が信仰を小さくすることもありえないのです。⁽⁴⁾

最後に、信仰が唯一なのは、信仰が全教会で共有されているからです。教会は一つのからだ、一つの霊だからです。わたしたちは、教会という唯一の主体の交わりの中で、共通のまなざしを与えられます。わたしたちは同じ信仰を告白することにより、同じ岩の上に堅く立ち、同じ愛の霊によって造り変えられ、唯一の光を輝かせ、唯一のまなざしをもって現実を見通すのです。

48 信仰は唯一なので、わたしたちは純粹かつ完全なしかたで信仰を告白しなければなりません。信仰箇条のすべては一つに結ばれているので、たとえそれほど重要に思われないものであっても、その一つでも否定すれば、全体を傷つけるのと変わリません。歴史のどの時代にも、信仰には、容易に受け入れられる点と、受け入れるのが難しい点が見いだされます。だから、ゆだねられた信仰の遺産がことごとく伝えられ（一テモテ6・20参照、信仰告白のあらゆる側面が適切に主張されるように注意することが大切なのです。実際、信仰の唯一性は教会の唯一性なので、信仰から何かを取り去ることは、交わりの真理から何かを取り去ることになります。教父たちは信仰を、からだ、すなわち、さまざまな部分から成る真理のからだと呼びました。これはキリストのからだという類比を用い、それを教会にまで拡大したも

のです。⁽⁴²⁾ 信仰の完全性は、おとめにたとえられた教会の姿と、キリストに対する教会の花嫁としての忠実な愛とも結びついています。信仰を傷つけることは、主との交わりを傷つけることを意味します。⁽⁴³⁾ それゆえ、信仰の唯一性は、生きた有機体の唯一性です。福者ジョン・ヘンリー・ニューマン（一八〇一―一八九〇年）がいみじくも述べたとおりです。ニューマンは、時代を超えた教理の連続性を示す特徴的なしるしは、自分が置かれたさまざまな場や、出会うさまざまな文化のうちに見いだすすべてのものを自らのうちに同化する力だといっています。⁽⁴⁴⁾ この力はすべてのものを清め、より洗練されたかたちで表現します。こうして信仰は、普遍的でカトリック的なものとして示されます。なぜなら、信仰の光は、宇宙と歴史の全体を照らすために広がるからです。

49 信仰の唯一性とその完全な伝達への奉仕のために、主は教会に使徒継承のたまものを与えました。この手段を通じて、教会の記憶の連続性が保証され、信仰がそこからわき出た清らかな源泉に確実に達することができるようになります。それゆえ、起源とのつながりの保証は、生きた人によって与えられます。このことは、教会が伝える生きた信仰に即しています。教会は、主がこの務めのために選んだ証人の忠実さをよりどころとします。そのため教

導職は、信仰がその基盤とする、根源的なみことばにつねに忠実に語ります。教導職に信頼が置けるのは、それが、聞き、保ち、説明するみことばに信頼しているからです。⁽⁴⁵⁾聖ルカによつて使徒言行録に書き記された、エフエソの長老たちへの告別説教の中で、聖パウロは、「神のご計画をすべて」(使徒言行録20・27参照)伝えるという、主からゆだねられた使命を果たしたとあかしします。教会教導職のおかげで、このご計画と、それを完全に果たす喜びが、完全に伝えられるのです。

第四章 神は、彼らのために都を準備されているのです

(ヘブライ11・16参照)

信仰と共通善

50 ヘブライ人への手紙は、旧約の太祖と義人の物語を示しながら、彼らの信仰の本質的な側面を強調します。信仰は旅路だけでなく、建物にもたとえられます。それは、人が他の人々と住むために準備する場所です。最初の建築家は、箱舟によって家族を救うことができたノアです(ヘブライ11・7参照)。次いで、アブラハムです。アブラハムについてはこう語られます。彼は信仰によって幕屋に住み、堅固な土台をもつ都を待望しました(ヘブライ11・9―10参照)。それゆえ、信仰によって、神だけが与えることのできる、新しい信頼、新しい堅

固さが生まれます。信仰の人は真実の神、忠実な神（イザヤ65・16参照）により頼むことによつて堅固にされます。そうであれば、わたしたちはこういうことができます。信仰の堅固さは、神が人間のために準備される都のしるしでもあります。信仰は、神がただ中にいてくださるなら、人々のきずなも堅固になることを示します。信仰は信じる者に内的な堅固さと揺るぎない確信を与えるだけではありません。信仰は人々の関係をも照らします。なぜなら、信仰は愛から生まれ、神の愛の力に従うからです。信頼の置ける神は、信頼の置ける都を人々に与えるのです。

51 信仰の光は、愛との結びつきのゆえに（ガラテヤ5・6参照）、正義と法と平和に対して具体的に奉仕します。信仰は神の根源的な愛との出会いから生まれます。この神のうちにわたしたちの人生の意味と価値が明らかになります。またわたしたちの人生は、この神の愛に開かれたダイナミズムに歩み入り、完全な愛への歩みと実践になればなるほど、照らされます。信仰の光は、人間関係の豊かさをも深めることができます。人間関係の豊かさとは、自らを保ち、信頼できるものとなり、共同生活を豊かにする力です。信仰は、わたしたちを世から遠ざけるものでも、現代人の具体的な取り組みに無関心にさせるものでもありません。信頼

の置ける愛がなければ、何も真の意味で人々の一致を保つことはできません。人々の一致は、有用性や利害の調整や恐れを基盤とするのであって、ともに生きることのよさや他の人がいてくれることだけで生まれる喜びに基づくのではないと考える人がいるかもしれません。信仰は人間関係という建物を理解させてくれます。なぜなら、信仰は、神とその愛における人間関係の究極的基盤と決定的な目的を把握し、そこから、共通善に奉仕する人間関係の築き方を照らすからです。まことに信仰はすべての人にとつての善、すなわち共通善です。信仰の光は、教会の内側を照らすだけでも、来世の永遠の都を築くのに役立つだけでもありません。それは、わたしたちが希望の未来に向けて歩めるように現代社会を築く助けともなるのです。このことに関して、ヘブライ人への手紙は一つの模範を示します。そこでは信仰の人としてサムエルとダビデが挙げられます。信仰は彼らが「正義を行う」（ヘブライ11・33）ことを可能にします。この表現は、彼らが正義をもつて統治し、知恵をもつて民に平和をもたらしたことを指しています（サムエル記上12・3―5、サムエル記下8・15参照）。信仰の手は天に向けて挙げられます。しかしそれは、愛のうちに、神の愛を基盤とする関係の上に建てられた都を築くためです。

信仰と家庭

52 ヘブライ人への手紙は、未来の都に向かうアブラハムの旅について、親から子へと祝福が伝えられることに触れます（ヘブライ11：20―21参照）。信仰が人間の国を照らす第一の場は、家庭です。わたしは何よりもまず、結婚による男女の堅固な結びつきに思いを致します。この結びつきは、男女の愛から生まれます。男女の愛は、神ご自身の愛と、男女の性差がよいものとして認められ、受け入れられたことの現存とします。この性差によって、夫婦は一体となり（創世記2：24参照）、新しいいのちを生み出すことができますからです。新しいいのちは、造り主のいつくしみと知恵と愛の計画の現れです。男と女は、この愛に基づいて、互いの愛を約束することができます。この約束の行為は、全生涯にかかわり、信仰のあらゆる特徴を思い起こさせてくれます。永遠の愛を約束することが可能なのは、わたしたちが自分たちの計画よりも偉大な計画を見いだすからです。この計画がわたしたちを支え、未来のすべてを愛する人にささげることを可能にします。信仰は、子どもを生むことの深く豊かな意味をも余すところなく理解する助けとなります。わたしたちは出産のうちに、新たな人格の神秘をわたしたちに与え、ゆだねる、造り主の愛を見いだすからです。そのためサラは信仰によって、ご自分の約束を忠実に守られる神に信頼することを通して、母となったのです。

(ヘブライ11・11参照)。

53 信仰は、家庭において、幼年期から始まり、人生のすべての年代に同伴します。子どもは両親の愛から、信頼することを学びます。そのため、両親が家庭の中で、子どもたちの信仰の成長に同伴する共同の信仰の実践に努めることが大切です。とくに、信仰にとって複雑かつ豊かで重要な人生の時期を過ごしつつある若者は、信仰の成長の歩みにおいて、家族と教会共同体の連帯と気遣いを感じることができなければなりません。わたしたちは皆、ワールドユースデー W Y D において若者たちが、信仰の喜びを示し、ますます堅固に惜しみなく信仰を生きようと努めているのを目にしました。若者は偉大な人生を生きたいと望んでいます。キリストと出会い、キリストの愛に捕らえられ、導かれることにより、人生の展望が広がり、欺くことのない堅固な希望が与えられます。信仰は臆病な人の逃れ場ではなく、わたしたちの人生を広げるものです。信仰は、偉大な招き、愛の召命に気づかせてくれます。それは、愛が信頼するに足り、引き受けるに値するものであることを約束してくれます。なぜなら、愛は、わたしたちのあらゆる弱さよりも強い、神の忠実を基盤とするからです。

社会生活を照らす光

54 家庭において身に着け、深められた信仰は、すべての社会関係を照らす光となります。神の父としての気遣いとあわれみを経験した信仰は、わたしたちを兄弟として歩むよう促します。「近代」は、平等に基づいて人類の普遍的兄弟愛を築こうと努めました。しかし、わたしたちは少しずつ、究極的な基盤としての共通の父に関連づけられることのない、このような兄弟愛は、長続きしないことに気づきました。それゆえ、兄弟愛の真の根拠に立ち帰る必要があります。信仰の歴史は、初めから、兄弟愛の歴史でした。たとえ争いもあったとしてもです。神はアブラハムに、自分の土地を離れるように招くとともに、彼を大いなる国民とし、彼らに神の祝福を与えると約束します（創世記12・1―3参照）。救いの歴史が進行するにつれて、人間は、神がすべての人を兄弟として唯一の祝福にあずからせるのを望んでおられることを見いだします。この祝福はイエスにおいて頂点に達します。それは、すべての人が一つになるためです。御父の尽きることはない愛は、イエスのうちに、また兄弟の存在を通じて、わたしたちに伝えられます。信仰は、すべての人のうちにわたしへの祝福があるのを見いだすことを教えてくれます。神のみ顔の光は、兄弟の顔を通してわたしを照らすのです。

キリスト教信仰のまなざしは、人間の国における共同生活のために、どれほど多くの恩恵をもたらしてきたことでしょうか。わたしたちは信仰のおかげで、一人ひとりの人格のかけがえのない尊厳を悟りました。それは古代世界ではそれほど知られていなかったものです。

二世紀に、異教徒のケルソスは、彼には幻想と偽りと思われたことのゆえに、キリスト教徒を非難しました。すなわち、神が人間のために世界を創造し、人間を全宇宙の頂点に置いたということです。そこで彼は尋ねました。「どうしてこれら(草)⁽⁴⁶⁾が非理性的動物のうちのもっとも野性的な動物のため以上に、人間のために生じたというのか」。「もしもだれかが天上から地上に目を注ぐなら、われわれによつてなされるものと、蟻や蜜蜂によつてなされるものとの間に、いったいどんな相違があるように見えるだろうか」⁽⁴⁷⁾。聖書の信仰の中心にあるのは、神の愛です。すべての人に対する神の具体的な気遣いです。全人類、全被造物に及び、イエス・キリストの受肉と死と復活において頂点に達した、神の救いの計画です。これらのことがあいまいにされるなら、何が人間のいのちを尊くかけがえのないものとするかを見分ける基準もなくなります。人間は宇宙における位置づけを失い、自然の中で道に迷います。こうして、自らの道徳的責任を放棄するか、さもなくば、自分こそが絶対的な支配者だと考え、自然を制約なしに操作する力を自らに与えるのです。

55 さらに信仰は、造り主である神の愛をわたしたちに示すことにより、わたしたちが自然をますます尊重し、神が書き記した文法と、耕し守るようわたしたちにゆだねられた住まいを自然のうちに見いだすことを可能にします。信仰はまた、有用性と利益だけを基準とするのでなく、被造物をわたしたち皆が責任を有するたまものとみなすような、発展モデルを見いだすための助けとなります。信仰は、権威は共通善に奉仕するために神から与えられるものであることを認識させることを通じて、正しい統治形態を造り出すことを教えます。信仰はまた、ゆるす力も与えます。ゆるすためには、時間と労苦と忍耐と努力が必要だからです。ゆるしが可能となるためには、善がつねに悪よりも根源的で強力であること、神がわたしたちの人生を肯定することばは、わたしたちのあらゆる否定よりも深いことを見いださなければなりません。また、純粹に人間的な観点から見ても、一致は紛争を凌駕します。わたしたちは紛争を非難しなければなりません。しかし、そのために、紛争を解決し、乗り越え、それが一つの鎖の輪となり、一致に向けて展開するよう、それを変容させなければなりません。信仰が弱まるとき、生きるための基盤も弱まる恐れがあります。詩人T・S・エリオット（二八八―一九六五年）が警告するとおりです。「上流社会で誇れるような地味な学識でさえ

／その意義を負っている信仰がなくなれば／まず生き残らないだろうと、諸君は告げられる必要があるのか？」⁽⁴⁸⁾ わたしたちの国から神への信仰を取り去るなら、わたしたちの間の信頼も弱まり、わたしたちは恐れゆえに一致を保つにすぎなくなり、その安定性も脅威にさらされます。ヘブライ人への手紙はいいです。「神は彼らの神と呼ばれることを恥となさいません。神は、彼らのために都を準備されていたからです」(ヘブライ11・16)。「恥となさいません」ということは、公に認知することと関連します。つまり神は、わたしたちのただ中におられ、人々の関係を堅固なものになりたいという望みを、具体的な行為によって告白するのです。わたしたちが神をわたしたちの神と呼ぶことを恥じるとすれば、どうなるでしょうか。わたしたちの公共生活の中で神を神として告白せず、神が可能にしてくださったともに生きる生活のすばらしさを示さなければ、どうなるでしょうか。信仰は社会生活を照らしめます。信仰は、歴史のあらゆる新たな瞬間に創造的な光を当てることができます。なぜなら信仰は、あらゆる出来事を、万物の起源と目的である、わたしたちを愛してくださる御父との関係の中に位置づけるからです。

苦しみの中で慰める力

56 聖パウロは、自分の艱難と苦しみについてコリントのキリスト者に書き送る際に、信仰と福音の宣教を関連づけます。実際、彼は「わたしは信じた。それで、わたしは語った」（二コリント4・13）という聖書の箇所が自分において実現したといえます。使徒は詩編116のことを参照しています。この詩編の中で、詩編作者は叫んでいます。「わたしは信じる、『激しい苦しみに襲われている』というときも」（10節）。信仰を語ることはしばしば、苦しい試練を語ることを伴います。しかし、聖パウロはまさにこのような試練のうちに、福音が説得力をもつて告知されるのを見いだします。なぜなら、弱さと苦しみのうちに、わたしたちの弱さと苦しみを乗り越える神の力が現れ、見いだされるからです。使徒自身、死の状況に置かれますが、死はキリスト信者にとっていのちとなるのです（二コリント4・7―12参照）。信仰は試練のときにわたしたちを照らします。そしてまさに苦しみと弱さの中で次のことが明らかとなります。「わたしたちは、自分自身をのべ伝えるのではなく、主であるイエス・キリストをのべ伝えています」（二コリント4・5）。ヘブライ人への手紙の11章は、終わりに、信仰のために苦しんだ人々に言及します（ヘブライ11・35―38参照）。その中で特別な位置を占めるのはモーセです。モーセはキリストへのあざけりを身に受けました（26節参照）。キリス

ト信者は次のことを知っています。苦しみを取り除くことはできません。しかし、苦しみは意味をもつことができます。わたしたちを見捨てることのない神の手に身をゆだねることによって、苦しみは愛する行為となることができます。こうして苦しみは信仰と愛が成長するための時となることができます。十字架上の激しい苦しみのときにもキリストが父と一つに結ばれていたのを仰ぎ見るにより（マルコ15・34参照）、キリスト信者はイエスご自身のまなざしにあずかることを学びます。死すらも、わたしたちを照らし、信仰への最後の招きとしてそれを生きることが可能です。それは最後の「あなたは生まれ故郷を離れなさい」（創世記12・1）という招きであり、父が語りかける最後の「来なさい」です。わたしたちは、父が最後の歩みの中でもわたしたちを堅固な者としてくださるという信頼をもって、この父に身をゆだねるのです。

57 信仰の光は、世の苦しみを忘れさせるものではありません。苦しむ人が、どれほど多くの信仰の人にとって、光の仲介者となってきたことでしょうか。アッシジの聖フランシスコ（一一八一／一一八二―一二二六年）にとつてのハンセン病の人、福者マザー・テレサ（一九二〇―一九九七年）にとつての貧しい人がそうです。彼らはこの人々のうちにある神秘を悟りま

した。彼らはこの人々に近づくことにより、苦しみをすべて取り去ることも、悪の意味をすべて説明することもできませんでした。信仰はわたしたちの暗闇をすべて打ち払う光ではありません。むしろそれは、夜の闇の中でわたしたちの歩みを導くともしびです。そしてこのともしびは、歩むために十分な光です。苦しむ人に対して、神はすべてを説明する理由を与えてくれません。しかし神は、ともにいて同伴するというかたちでこたえてくださいます。いつくしみの歴史というかたちでこたえてくださいます。この歴史が、あらゆる苦しみの歴史を結び合わせ、光の道を開いてくれるのです。神はキリストにおいて、わたしたちにこの道を分け与え、ご自分のまなざしを与えてくださいます。それは、わたしたちが神のまなざしをもつて光を見ることができるようにするためです。キリストは、苦しみを耐え忍ぶことにより「信仰の創始者また完成者」(ヘブライ12・2)となられたかたなのです。

苦しみはわたしたちに次のことを思い起こさせてくれます。信仰による共通善への奉仕は、つねに希望への奉仕です。この希望は前を見つめます。それは、わたしたちの社会が、神から、すなわち、復活したイエスからもたらされる未来から、初めて堅固で永続的な基盤を見いだすことができることを知っているからです。この意味で信仰は希望と結ばれています。なぜなら、たとえわたしたちの地上の住みかが滅びても、神がキリストとそのからだのうち

にすでに備えてくださった永遠の住みかがあるからです（二コリント4・16、5・5参照）。こうして信仰と希望と愛の力は（一テサロニケ1・3、一コリント13・13参照）、「神が設計者であり建設者である」（ヘブライ11・10）都へと向かうわたしたちの旅路の中に、すべての人の心配事を包み込みます。なぜなら、「希望はわたしたちを欺くことがない」（ローマ5・5）からです。

信仰と愛と一つに結ばれた希望は、わたしたちを確かな未来へと導きます。この未来は、世の偶像が示す幻想の未来とは異なりますが、日々の生活を生きるための新たな刺激と力を与えます。希望を奪われてはなりません。短絡的な解決や提案によって希望を台なしにしてはなりません。これらの提案は、わたしたちの歩みを妨げるばかりか、時間を「断片化」して、空間に変えてしまうからです。時間はつねに空間にまざります。空間がプロセスを止めてしまうのに対して、時間は未来へと導き、希望をもって歩むよう促すのです。

信じたかたは、なんと幸いでしよう（ルカ1・45）

58 種を蒔く人のたとえの中で、聖ルカは「よい土地」の意味を説明するイエスのことばを伝えています。「よい土地に落ちたのは、立派な善い心でみことばを聞き、よく守り、忍耐

して実を結ぶ人たちである」(ルカ8・15)。ルカによる福音書の文脈の中で、立派な善い心
でみことばを聞き、よく守るといふ表現は、おとめマリアの信仰を暗黙のうちに表現してい
ます。同じ福音書記者は、マリアが、自分の聞いたこと、見たことをすべて記憶し、心に収
めたと語ります。それは、みことばが彼女の生活の中で実を結ぶためです。主の母は信仰の
完全な鏡です。聖エリサベトが述べるとおりです。「信じたかたは、なんと幸いでしよう」
(ルカ1・45)。

シオンの娘であるマリアのうちに、旧約の信仰の長い歴史、すなわち、女サラから始まる
多くの信仰の女性たちの物語が完成します。太祖と並んで、サラにおいて、神の約束が実現
され、新しいいのちが生まれました。時が満ちて、神のことばがマリアに語りかけられます。
するとマリアは自らの存在と心にみことばを完全に受け入れました。こうしてみことばはマ
リアのうちに肉をとり、人類の光として生まれました。殉教者聖ユスティノは『ユダヤ人ト
リユフォンとの対話』の中ですばらしい表現を用いています。ユスティノはいいいます。マリ
アは、天使のお告げを受け入れる際、「信仰と喜び⁴⁹」を宿しました。実際、イエスの母にお
いて、信仰は豊かな実りを示します。わたしたちの霊的生活が実を結ぶときも、わたしたち
は喜びで満たされます。喜びは信仰の偉大さのはっきりとしたしるしです。マリアはその生

涯において、御子に従って、信仰の旅路を完成しました。⁽⁵⁰⁾ こうして、マリアにおいて旧約の信仰の歩みは、イエスに従うこととして受け取られ、イエスによって造り変えられ、受肉した神の子のまなざしそのものの中に入るのです。

59 わたしたちはこういうことができます。聖なるおとめマリアのうちに、わたしがこれまで述べてきたことが実現します。すなわち、信じる者は信仰を告白するとき、自分のすべてをかかわらせるということです。マリアは、イエスとのきずなのゆえに、わたしたちが信じていることと密接に結ばれています。わたしたちは、マリアがおとめとして受胎したことの中に、キリストが神の子であることを表すはつきりとしたしるしを認めます。キリストは父から永遠に生まれたかたです。キリストは完全に、また独自の意味で子です。だからキリストは男性の協力なしに、時間の中で生まれます。イエスは子なので、新しい始まりと新しい光を世にもたらすことができます。それは人類に与えられた、神の忠実な愛の完成です。他方で、マリアがまことの母であることは、神の子がまことの人間の歴史を歩むことの保証となります。すなわち、まことの肉の保証となります。この肉において、神の子は十字架上で死んで、死者の中から復活するのです。マリアは十字架に至るまで神の子とともに歩みま

す（ヨハネ19・25参照）。この十字架から、マリアは御子のすべての弟子の母となります（ヨハネ19・26―27参照）。マリアはイエスの復活と昇天の後、二階の広間にいて、使徒たちとともに聖霊のたまものを祈り求めます（使徒言行録1・14参照）。霊における御父と御子の間の愛の流れは、わたしたちの歴史を歩みます。キリストはわたしたちを救うために、わたしたちをご自身へと引き寄せます（ヨハネ12・32参照）。信仰の中心にあるのは、神の子であるイエスについての告白です。神の子は、女から生まれ、聖霊のたまものにより、わたしたちを神の養子としてくださるのです（ガラテヤ4・4―6参照）。

60 教会の母であり、わたしたちの信仰の母であるマリアに、わたしたちは祈ります。

聖母よ、わたしたちの信仰を助けてください。

わたしたちの耳を開いて、みことばを聞くことができるようにしてください。神のみ声と招きを知ることができますように。

神に従い、自分の故郷を離れ、約束を受け入れることへの望みをわたしたちの心に燃え立たせてください。

どうかあなたの助けによって、神の愛がわたしたちに触れてくださいますように。わたし

たちも信仰をもつて神に触れることができますように。

あなたの助けによって、わたしたちが神に完全に身をゆだね、神の愛を信じることができ
ますように。とくに試練と十字架によって、わたしたちの信仰が成長するように招かれると
きに。

わたしたちの信仰のうちに、復活した主の喜びの種を蒔いてください。

信じる者は決して独りきりではないことを、わたしたちに思い起こさせてください。

イエスの目をもって物事を見ることを教えてください。イエスがわたしたちの歩みの光と
なつてくださいますように。そして、この信仰の光がわたしたちの中でますます強められ、
あの沈むことのない太陽に達することができますように。この太陽こそ、あなたの子であり、
わたしたちの主である、キリストです。

二〇一三年（教皇在位第一年）六月二十九日 聖ペトロ・パウロ使徒の祭日

ローマ、聖ペトロのかたわらにて

フランシスコ

序文

- (1) 殉教者ユステイノ「ユダヤ人トリュフォンとの対話」(*Dialogus cum Tryphone Indaeo*, 121, 2: PG 6, 758)。
- (2) アレクサンドリアのクレメンス『ギリシア人への勧告』(*Protrepticus*, IX: PG 8, 195)。
- (3) F・ニーチュエ「エリーザベト・ニーチュエ」(*Brief an Elisabeth Nietzsche* [11. Juni 1865], in: *Werke in drei Bänden*, München 1954, 953s. [塚越敏訳]、『ニーチュエ全集第十五巻 書簡集I』理想社、一九六八年、五八一—五九頁)。
- (4) ダンテ『神曲 天国篇』(*Paradysus*, XXIV, 145-147 [寿岳文章訳、集英社、一九八七年、二二五頁])。
- (5) 『殉教録』(*Acta Sanctorum*, Iunii, I, 21)。
- (6) 「公会議は信仰についてはつきりと語りはしませんでした、あらゆるところで信仰を語り、信仰の生きた超自然的性格を認め、信仰を完全かつ強力に示し、公会議の教えを信仰の上に築きました。公会議の述べたことを思い起こせば……公会議が、教会の教えの伝統に従って、信仰を根本的に重要だと考えたことを十分に理解できます。このまことの信仰は、キリストを源泉とし、教会の教導職を導き手としています」(教皇パウロ六世「一般謁見(一九六七年三月八日)」: *Insegnamenti*, V [1967], 705)。
- (7) たとえば、第一バチカン公会議『カトリック信仰に関する教義憲章』第三章(*Dei Filius*: DS 3008-3020)、第二バチカン公会議『神の啓示に関する教義憲章』5 (*Dei Verbum*)、カトリック教会のカテキズム』153—165参照。

第一章

- (8) エルサレムの聖ナリロ『教話』(*Catechesis*, V, 1: PG 33, 505A) 参照。
- (9) 聖アウグスティヌス『詩編注解』(*In Psal.*, 32, II, s. I, 9: PL 36, 284)〔菊地伸二訳〕、『アウグスティヌス著作集18 / I 詩編注解(1)』教文館、一九九七年、四二七頁)。
- (10) M. Buber, *Die Erzählungen der Chasidim*, Zürich 1949, 793.
- (11) J = J・ルソー『エミール』(*Émile*, Paris 1966, 387)〔樋口謹一・松田清・西川長夫訳〕、『ルソー全集第七巻』白水社、一九八二年、六八頁)。
- (12) 同「ボームンへの手紙」(*Lettre à Christophe de Beaumont*, Lausanne 1993, 110)〔前掲邦訳、五一六頁)。
- (13) 聖アウグスティヌス『ヨハネ福音書講解』(*In Ioh. Evang.*, 45, 9: PL 35, 1722-1723) 参照。
- (14) F・M・ドストエフスキー『白痴』第二部四(小沼文彦訳、『ドストエフスキー小説全集7』筑摩書房、一九七六年、二一九頁)。
- (15) 聖アウグスティヌス『禁欲』(*De continentia*, 4, 11: PL 40, 356)〔今義博訳〕、『アウグスティヌス著作集27 倫理論集』教文館、二〇〇三年、一一一頁)。
- (16) R. Guardini, *Vom Wesen katholischer Weltanschauung* (1923), in: *Unterscheidung des Christlichen. Gesammelte Studien* 1923-1963, Mainz 1963, 24.

第二章

- (17) 聖アウグスティヌス『告白』(*Confessiones*, XI, 30, 40: PL 32, 825)〔山田晶訳〕、『世界の名著14 アウグスティヌス

告白』中央公論社、一九六八年、四三五―四三六頁)。

(18) 同 (*ibid.*, 825-826) 参照。

(19) ルートヴィヒ・ウイトゲンシュタイン『反哲学的断章』(Vernishe Bemerkungen / Culture and Value, ed. G. H. von

Wright, Oxford 1991, 32-33; 61-64 [丘澤静也訳、青土社、一九八一年、八八―九二、一六三―一七一頁]) 参照。

(20) 聖大グレゴリオ『福音書講話』(*Homiliae in Evangelia*, II, 27, 4: PL 76, 1207 [熊谷賢二訳、創文社、一九九五年、三四九頁])。

(21) サン・ティエリのギヨーム『雅歌注解』(*Expositio super Cantica Cantorum*, XVIII, 88: CCL, Continuatio Mediaevalis 87, 67) 参照。

(22) 同 (*ibid.*, XIX, 90: CCL, Continuatio Mediaevalis 87, 69)。

(23) 『啓示する神に対しては『信仰の従順』(ローマ 16・26 参照。ローマ 1・5、二コリント 10・5―6 も参照)を示さなければならぬ。この従順によつて、『啓示する神に知性と意志の全き服従』を示すことにより、また、神から与えられた啓示に自発的に同意することにより、人間は自己のすべてを神に自由にゆだねるのである。このような信仰が生じるためには、それに先だつ神の助力の恩恵と聖霊の内からの援助が必要である。聖霊は心を動かして神に向かわせ、知性の眼を開き、『真理に同意してこれを信じることの甘美さをすべての人に』与えるであろう。こうしてこの聖霊は、啓示がいつそう深く理解できるように、信仰を自分のたまものによつてたえず完成しようとするのである』(第二バチカン公会議『神の啓示に関する教義憲章』5: *Dei Verbum*)。

(24) H. Schlier, *Meditationen über den Johanneseischen Begriff der Wahrheit*, in: *Bestimmung auf das Neue Testament. Exegetische Aufsätze und Vorträge 2*, Freiburg, Basel, Wien 1959, 272 参照。

- (25) 聖トマス・アクィナス『神学大全』(S. Th., III, q. 55, a. 2, ad 1〔稲垣良典訳、『神学大全 39・40』創文社、二〇一二年、四二頁) 参照。
- (26) 聖アウグスティヌス『説教』(Sermo 229/L, 2: PLS 2, 576)。
- (27) 教皇ヨハネ・パウロ二世回勅『信仰と理性(一九九八年九月十四日)』73 (Fides et ratio: AAS 91 [1999], 61-62) 参照。
- (28) 聖アウグスティヌス『告白』(Confessiones, VIII, 12, 29: PL 32, 762〔前掲山田晶訳、二八五―二八六頁) 参照。
- (29) 同『三位一体論』(De Trinitate, XV, 11, 20: PL 42, 1071〔泉治典訳、『アウグスティヌス著作集 28 三位一体』教文館、二〇〇四年、四六二頁)。
- (30) 同『神の国』(De civitate Dei, XXII, 30, 5: PL 41, 804〔泉治典訳、『アウグスティヌス著作集 15 神の国』(5) 教文館、一九八三年、三八〇頁) 参照。
- (31) 教皇庁教理省宣言『主イエス(二〇〇〇年八月六日)』15 (Dominus Iesus: AAS 92 [2000], 756) 参照。
- (32) 聖イレネオ『使徒たちの使信の説明』(Demonstratio apostolicae praedicationis, 24: SC 406, 117〔小林稔・小林玲子訳、『中世思想原典集成 1 初期ギリシア教父』平凡社、一九九五年、二一八頁)。
- (33) 聖ボナヴェントゥラ『神学提要』(Breviloquium, Prol.: Opera omnia, V, Quaracchi 1891, 201)、『命題集注解』(In I Sent., proem., q. 1, resp.: Opera Omnia, I, Quaracchi 1891, 7)『聖トマス・アクィナス『神学大全』(S. Th., I, q. 1) 参照。

第三章

- (34) テルトゥリアヌス『洗礼について』(*De Baptismo*, 20, 5: CCL 1, 295 [佐藤吉昭訳、』中世思想原典集成 4 初期ラテン教父』平凡社、一九九九年、六八頁) 参照。
- (35) 第二バチカン公会議『神の啓示に関する教義憲章』8 (*Dei Verbum*)。
- (36) 第二バチカン公会議『典礼憲章』59 (*Sacrosanctum Concilium*) 参照。
- (37) 『バルナバの手紙』(*Epistula Barnabae*, 11, 5: SC 172, 162 [佐竹明訳、』使徒教父文書』講談社、一九九八年、六五頁) 参照。
- (38) 聖アウグスティヌス『結婚と情欲』(*De nuptiis et concupiscentia*, I, 4, 5: PL 44, 413) : “Habent quippe intentionem generandi regenerandos, ut qui ex eis saeculi filii nascuntur in Dei filios renascantur” 参照。
- (39) 第二バチカン公会議『神の啓示に関する教義憲章』8 (*Dei Verbum*)。
- (40) 聖大レオ『主の降誕についでの説教』(*In nativitate Domini sermo* 4, 6: SC 22, 110 [熊谷賢二訳、』キリストの神秘——説教全集』創文社、一九六五／一九九三年、二二頁)。
- (41) 聖イレネオ『異端反駁』(*Adversus haereses*, I, 10, 2: SC 264, 160) 参照。
- (42) 同 (*ibid.*, II, 27, 1: SC 294, 264) 参照。
- (43) 聖アウグスティヌス『聖なる処女性について』(*De sancta virginitate*, 48, 48: PL 40, 424-425) : “Servatur et in fide inviolata quaedam castitas virginalis, qua Ecclesia uni viro virgo casta coaptatur” 参照。
- (44) John Henry Newman, *An Essay on the Development of Christian Doctrine*, Uniform Edition: Longmans, Green and Company, London, 1868-1881, 185-189 参照。

- (45) 第二バチカン公会議『神の啓示に関する教義憲章』10 (*Dei Verbum*) 参照。

第四章

- (46) オリゲネス『ケルソス駁論』(*Contra Celsum*, IV, 75: SC 136, 372 [出村みや子訳, 『キリスト教教父著作集 9 オリゲネス 4 ケルソス駁論Ⅱ』教文館, 一九九七年, 一五八頁])。
 (47) 同 (*ibid.*, 85: SC 136, 394 [前掲邦訳, 一六七頁])。
 (48) T・S・エリオット「『岩』のコーラス」(“Choruses from *The Rock*” in: *The Collected Poems and Plays* 1909–1950, New York 1980, 106 [田村隆一訳, 『エリオット詩集』彌生書房, 一九六七／一九八四年, 一二六頁])。
 (49) 殉教者ユステイノ『ユタヤ人トリュフォンとの対話』(*Dialogus cum Tryphone Iudaeo*, 100, 5: PG 6, 710) 参照。
 (50) 第二バチカン公会議『教会憲章』58 (*Lumen gentium*) 参照。

略号

AAS	Acta Apostolicae Sedis
CCL	Corpus Christianorum Series Latina
DS	Denzinger-Schönmetzer, <i>Enchiridion symbolorum definitionum et declarationum de rebus fidei et morum</i>
PG	Patrologia Graeca
PL	Patrologia Latina

注

PLS Patrologia Latina, Supplementum

SC Sources Chrétiennes

* 聖書の引用は原則として日本聖書協会『聖書 新共同訳』（二〇〇〇年版）を使用しました。ただし、漢字・仮名の表記は本文に合わせたことをお断りいたします。

訳者あとがき

本書は二〇一三年三月十三日に第二六六代教皇として選出された、教皇フランシスコの最初の回勅『信仰の光』(Lumen fidei 二〇一三年六月二十九日付)の邦訳です。

回勅は二〇一三年七月五日に発表されました。教皇はその二日後の七月七日(日)の「お告げの祈り」で、回勅の内容を次のように紹介しています。

ご存じのとおり、二日前、信仰をテーマとする回勅を公布しました。回勅の標題は『信仰の光』です。教皇ベネディクト十六世は「信仰年」のために、愛と希望についての回勅に続く、この回勅を書き始めました。わたしはこの労作を受け止め、完成させました。この回勅を神の民全体に喜びをもって示します。実際、とくに現代において、わたしたちは、キリスト教信仰の本質を訪ね、深く考察し、現代の諸問題とともに検討しなければなりません。ところで、今回の回勅の少なくとも一部は、神と人生の意味を探

求する人々にも役立つと思います。わたしはこの回勅を、信仰の完全な鏡であるマリヤのみ手にゆだねます。この回勅が主の望まれる実りを結ぶことができますように。

本回勅の背景となっているのは、教皇が述べるとおり、教皇ベネディクト十六世の呼びかけで二〇一二年十月十一日から二〇一三年十一月二十四日まで開催された「信仰年」です。ところで、本回勅が、前任の教皇によって準備されたテキストに多くを負い、またそのことを回勅を公布した教皇自身が明記しているのも（序文7参照）、あまり例のないことだといえます。そこでこの回勅は、新教皇の最初の回勅であると同時に、対神徳（信仰・希望・愛）の一つを扱うことによってベネディクト十六世の回勅『神は愛』（*Deus caritas est* 二〇〇五年十二月二十五日）と『希望による救い』（*Spe salvi* 二〇〇七年十一月三十日）と三幅対をなすものとして読むことができるのです。

本書は序文と四章から成ります。回勅のテーマ「信仰の光」の意味を提示する序文に続いて、第一章は、旧約から新約に至るまでの、信じる者の「歩み」としての信仰の姿を示します。第二章は、認識としての信仰を考察します。関連して、信仰と科学、諸宗教対話、神学との関係にも言及されます。第三章は、教会における信仰のあり方を扱います。ここでは信

仰と秘跡、道徳とのかかわりが語られます。最後に第四章は、社会生活における信仰の意味を取り上げます。これに関連して、共通善、家庭、兄弟愛と被造物の保護、政治、苦しみの意味といったテーマに触れます。

本書は、キリスト教信仰が「キリストを中心とし」た「完全な愛への信仰」(15)であり、「わたしたちが希望の未来に向けて歩めるように現代社会を築く助けともなる」(51)ことを、聖書に基づいてうむことなく解き明かします。最後に著者は述べます。「信仰はわたしたちの暗闇をすべて打ち払う光ではありません」が、「夜の闇の中でわたしたちの歩みを導くともしびです。そしてこのともしびは、歩むために十分な光です」(57)。「信仰年」を終えた教会が、この信仰の光に導かれて歩んでいくことができますように。

邦訳にあたり、ラテン語規範版を底本として用い、合わせて、イタリア語、英語、ドイツ語、フランス語の各版を参照しました。

二〇一三年十一月二十四日 王であるキリストの祭日

訳者

LITTERAE ENCYCLICAE
LUMEN FIDEI
Libreria Editrice Vaticana © 2014

事前に当協議会事務局に連絡することを条件に、通常の印刷物を読めない、視覚障害者その他の人のために、録音または拡大による複製を許諾する。ただし、営利を目的とするものは除く。なお点字による複製は著作権法第 37 条第 1 項により、いっさい自由である。

回 信 仰 の 光

2014 年 2 月 10 日 第 1 刷 発行 日本カトリック司教協議会認可
2014 年 8 月 8 日 第 2 刷 発行

著 者 教皇フランシスコ

訳 者 カトリック中央協議会 司教協議会秘書室研究企画

発 行 カトリック中央協議会

〒135-8585 東京都江東区潮見 2-10-10 日本カトリック会館内

☎03-5632-4411 (代表)

印 刷 株式会社精興社

© 2014 Catholic Bishops' Conference of Japan, Printed in Japan
定価はカバーに表示してあります ISBN978-4-87750-179-2 C0016

乱丁本・落丁本は、弊協議会出版部あてにお送りください
弊協議会送料負担にてお取り替えいたします